

富田林市の埋蔵文化財 —埋蔵文化財基本分布図—

注：刊行当時の分布図面が掲載されていますので
最新の情報は市にお問い合わせください。



昭和53年3月

富田林市教育委員会

「富田林市の埋蔵文化財」発刊にあたって

本市には、終末期古墳として全国的に注目されているお龜石古墳をはじめ、数多くの埋蔵文化財が残されています。

しかしながら、近年の地域開発の波は、これら埋蔵文化財の破壊を招き大きな社会問題となっております。

そこで本市においては、その保護・保存を図るため、昭和46年より独自の方法で埋蔵文化財の実態を調査し、その結果をまとめて、このたび資料集「富田林市の埋蔵文化財」を刊行するはこびとなりました。

各位におかれましては、本資料集をご活用のうえ、埋蔵文化財の保護・保存のため、格別のご配慮をたまわりますようお願い申し上げます。

なお本資料作成にあたり終始ご指導賜わりました諸先生方をはじめ調査に全面的協力をいただいた方々に心よりお礼申し上げます。

昭和53年3月

富田林市教育委員会
教育長 岩井 好一

例 言

遺跡分布図に収録した遺跡の位置及び範囲は、すでに周知されていたものに加えて、富田林市教育委員会が昭和46年から昭和51年にかけておこなった、市内全域の埋蔵文化財分布調査によって得た資料をもとに作成したものである。

本書の基本資料作成のもとになった調査には、主任補佐として現天理大学附属天理参考館学芸員の竹谷俊夫氏、調査員として大阪府立富田林高等学校・河南高等学校両考古学クラブ員の尽力を得た。

なお、本書は市教育委員会として文化財の保護、保全および周知の目的で刊行するものであって、法的に根拠をもつ資料としては大阪府教育委員会が埋蔵文化財分布図において文化財の認定をしたところに依拠することも明らかにしておきたい。

本文は竹谷俊夫氏が執筆し、全体指導及び監修は、本市文化財調査会委員北野耕平氏が担当した。

ここに記して感謝の意を表する。

富田林市教育委員会

はじめに

富田林市内の埋蔵文化財遺跡の存在が、人に知られ始めたのは、19世紀末の明治20年代のことである。エドワード・エス・モースが東京西郊の大森で初めて貝塚を発掘してから、僅か十数年後の早い時期といえよう。当時、中野・喜志の両遺跡や、お龜石古墳が相次いで学界に報告されたが、その後遺跡の発見数も増加して、現在では75か所を数えるに至っている。

文化財はその地域住民にとって豊かな知的関心を刺激し、歴史的連帯感を深める資源である。祖先の生活の営みが現代につながり、さらに未来に続くことを考えると、その生き証人ともいるべき文化財を大切に保存し、次代に伝えることはわれわれの努力にかかるといえよう。地域開発が現代社会の発展する条件として必然的なものであれば、それだけに地域の貴重な埋蔵文化財の価値を認識して、保存に対する十分な配慮の上に立つ計画を求めていた。本書は1978年現在までに知られた市内に分布する重要な埋蔵文化財遺跡であって、その中にはこれまでの間に破壊消滅した若干の遺跡も含んでいる。

富田林市をめぐる埋蔵文化財

1.

最も人類が地球上に姿を現わして以来、現代までの文化の発展はとどまることなく歩み続けてきた。その100万年近い歴史は世界各地で発掘される遺構や遺物を通じて知ることができる。日本列島でも化石人骨の破片や、簡単に割合加工した握斧などの石器によって、数十万年前の先土器（旧石器）時代から人類が居住し、文化の営みが始まったことを明らかにした。放射性炭素による年代測定では、一万余年前に土器文化が始まり、縄文・弥生・古墳という各時代をへて歴史時代に及んでいる。このように地下から発見される考古資料を埋蔵文化財と称している。

富田林市は大阪府の東南部に位置していて、東西 6.4° 、南北 10.1° の菱形に似た市域を有している。地形からみると大阪府の中央部の低い平野に対して、東南部は金剛・生駒山地、和泉山地などから派生してきた丘陵地帯で、その谷地の間をいくつかの河川が南から北に向って貫流している。この谷状地を流れ最も大きい川が石川で、北方の大坂平野に達して奈良盆地から流出してきた大和川と合



図-1 寺池遺跡出土の石鏃



図-2 寺池遺跡出土の石匙および皮劍など不定形石器



図-3 鬼瀬の佐備川遺跡全貌



図-4 喜志遺跡出土の石槍・石鎌・石包丁・皮剝 石槍長さ22.5cm

流したのち、大阪湾に注いでいる。

市域の東半は石川谷の中流域にあたり、西半は羽曳野丘陵と狭山谷の一部に及んでいて、東西にかけては起伏に富む地形をなしている。市内の多くの遺跡はこの東半の石川谷に面した河岸段丘上に分布していて、西半の羽曳野丘陵地帯では乏しい。特に縄文・弥生・古墳および歴史時代の集落跡が、河岸段丘上に位置する傾向をもつて対して、古墳が段丘に臨む丘陵の突端を立地として選んでいる事実は、他の諸地域に見られるところとよく一致する。寺院址もまた集落に接近して営まれている場合が多い。この諸遺跡の分布の状況は、後半の埋蔵文化財分布地図を通じて明らかに理解できるであろう。

2

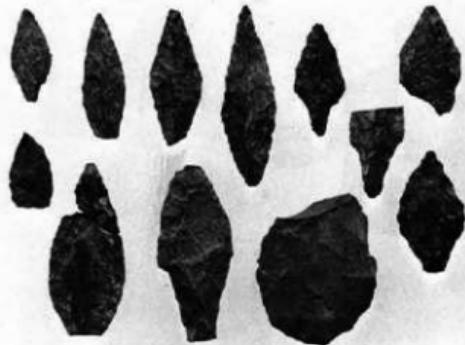


図-5 喜志遺跡出土の石器

富田林市内ではまだ確実に先土器時代に遡るといえる古い遺跡は発見されていない。しかし石川谷の下流域にあたる藤井寺市国府遺跡からは、前期の縄文土器包含層の下に、土器を伴わないサヌカイトの打製石器だけの文化層が発見されていて、大阪府下の高槻市や枚方市、東大阪市などの幾つかの遺跡とともに、大阪南部でも先土器時代の遺跡が分布していることがいえる。また近年では、二上山麓でもサヌカイトの石核や剥片を利用したと考えてもよい加工石片が採集されていて、関心を高めている。サヌカイトというのは、火山から噴出した黒色緻密な堅い安山岩のことである。近畿・中国・四国地方の遺跡では、石器の材料として先土器時代から縄文・弥生時代にかけて広く使用された。二上山はサヌカイトを産出する主要な地帯の東端にあたり、近畿地方の中心に位置していた関係で、当時は最も著名な石器原石の供給源であったと考えられる。

3



図-6 細井遺跡出土の石匙・石鎌・石槍・石錐など
右端の石槍、長さ7.8cm

さて縄文文化の時代は土器が登場するとともに、狩猟・採集という文化のパターンが世界でも比類のないほど長く続いた期間であった。放射性炭素による年代測定では約1万年間という。この期間を草創期・早期・前期・中期・後期・晚期とふつう6期に分けているが、市内の遺跡に現在の段階で関係があるのは前期であって、後述する錦織の縄文遺跡がこの時期にあたっている。

縄文時代は日本列島上にまだまだ人口は少なく、しかも農耕生活のように定住することは食糧資源を獲得する上で問題があったから、

彼らはかなり自由に漂泊したと考えられる。特に当時の日本列島では東に人口が集中し、西に稀薄な傾向があつて、その現象を生じたのは、東日本に豊富なサケ・マスや、浅海の貝類を捕食できることと関係があるのではないかという説がある。

大阪府下での縄文遺跡の分布は関東地方などに比べて格段に少なく、特に各時期別に区分してみるとさらに稀薄となる。この中で比較的に多いのは生駒山地の西麓地帯で、それも北方の淀川に近いところに集中する傾向が認められる。

しかし錦織遺跡を考える上で最も重要なのは、さきに先土器文化の遺物を発見した遺跡として挙げた藤井寺市国府遺跡である。この遺跡の調査は大正年間以来よく行われて、学界に極めて著名な遺跡であつて、多数の前期の縄文土器と各種石器を出土した。ことに当時の埋葬遺跡が発掘された結果、遺体を折りかがめで仰臥した姿勢で埋葬する屈葬の型式が広く行われたことや、遺体の頭部に縄文土器の甕を被せたり、胸に石塊を抱かせるなど特異な葬法も判明した。国府遺跡は当時としては西日本で比較的規模の大きい集落を形成していたとみられ、北方に大阪湾からの広い入江をもち、東方に山系を有することなどが、その生活を支える基盤となつたことであろう。錦織遺跡はこの国府遺跡と深い関係をもち、おそらくここから石川を遡上した縄文人によって形成されたと考えられることは、後の錦織遺跡の項で観察するとおりである。

4

次に弥生時代になると、大阪溝岸に沿う大阪平野は肥沃な低湿地と豊かな水に支えられて、各地に数多くの集落が形成された。比較的古い集落遺跡はやはり生駒山麓の扇状地や河川に面した微高地に分布する傾向が認められる。その理由は弥生集落が水稻栽培という低湿地での農耕を、生業の基盤としたためである。弥生時代の約400年間を前期・中期・後期と3期に区分するが、市の弥生遺跡は中期と後期に属するもので、前期に遡るものはない。

弥生文化と縄文文化との関係についてはまだ未解決の問題が多く、水稻栽培が北九州地方で縄文晩期から始まっていたらしいから、弥生文化はこの水稻栽培という農耕文化が北九州で定着した段階で生まれたものである。しかし縄文文化の狩猟・採集経済に比べて、食糧資源を自らの生産手段によって確保する農耕経済は、当時の社会体制を一変してしま

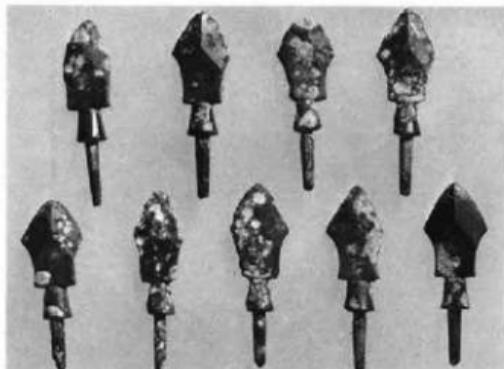


図-7 廿山古墳出土の銅鏑 右下、長さ5.8cm 東京国立博物館



図-8 南方からみた板持丸山古墳(1954年撮影)



図-9 板持丸山古墳出土の三神三獸鏡 面径16.1cm 東京国立博物館



図-10 田中古墳第2号墳出土の家形石棺々蓋(裏返し)
富田林市立第二中学校



図-11 彼方丸山古墳出土の朝顔形埴輪の上部 大阪府教育委員会



図-12 彼方丸山古墳出土の朝顔形埴輪の脚部 大阪府教育委員会

った。大陸から伝えられた稻作農耕にはそれほどの民族の渡来は必要ではなく、おそらく從來の權文社會の人々が急速に文化変容を生じたと考えられる。その結果、前期の北九州に起源した弥生の遠賀川式土器は、ごく短期間に瀬戸内海の沿岸を東進し、近畿地方を席捲して中部地方にまで達したのである。

さらに弥生文化は金屬器の文化でもあった。朝鮮半島や大陸から伝わった青銅器は北九州を中心に受け入れられたが、やがて銅劍・銅鋒・銅戈などがこれらの地域でも鋳造されるようになった。近畿地方では銅鋒という特異な儀式用の青銅器が、兵庫県、大阪府、奈良県など各地の弥生遺跡で生産され、広く供給された。

銅鋒は羽曳野市や太子町で発見例があるものの、残念ながら市内では銅鋒をはじめ弥生時代の青銅器の確実な出土例はない。市内南部の金胎寺山の西麓で銅鋒がかって出土したと伝えているが、確実なものとするためにはもう少し慎重な調査が必要であろう。

5

古墳文化は畿内を中心として発展しただけあって、この段階になると市内にも多数の古墳分布をみることができる。古墳時代も弥生時代と同様に前期・中期・後期の3期に区分していく。市内にはそのいずれの時期の古墳も存在している。この時代は3世紀末から4世紀初頭に古墳が出現し、5世紀を中心とする中期をへて、6～7世紀の後期へと移っていく。最近7世紀の古墳を終末期として区別することも提唱されているが、飛鳥時代と重複する時代区分をどう扱うか今後の研究課題である。

大阪府は奈良県・京都府と並んで著名な古墳が多く、淀川以北の北摂、生駒西麓、大阪東南部、和泉中部などの丘陵突端にまず前期古墳の分布をみる。富田林市の付近では石川谷入口の東縁にあたる玉手山丘陵と国分丘陵の地域である。

市内には銅鋒を出土した甘山古墳(図-7)や真名井古墳があり、いずれも4世紀末の築造とみられ、石川谷の中流域を支配した有力なこの地方の豪族の墳墓であろう。ことに真名井古墳は墳頂に立つと東方の石川両岸の平地を一望できる景勝の位置にあったが、宅地造成のためにすっかり削られてしまったのは残念でならない。付近には鍋塚や美具久留御魂神社境内古墳のように古い時期に属するもののか、真名井古墳の背後には宮前山古墳(図-13)、宮前山古墳(図-15)など後期

の石棺や横穴式石室をもつ古墳もあった。

中期になると日本最大の規模の古墳をもつ古市古墳群と百舌鳥古墳群が大阪南部で東西に分布している。全長470mの前方後円墳もその中に含まれている。その中の小型古墳であっても、鐵刀・劍・甲冑（かっちゅう）・鐵鎌などの鐵製武器と鍬（くわ）・鎌・斧・刀子（とうす）などの農具や工具を大量に副葬しているのが特徴である。市内の中期古墳は川西付近に円墳が分布している。

古墳の出現はその地域社会に豪族という權力者が成立したことを意味するが、そうした階級社会は弥生時代の共同体社会の中から生じたものである。中期の大規模な古墳はその地域統一が、畿内を中心に西日本あるいは東日本にも拡大されることを示し、大和国家の成立を考古学的に実証するものであろう。

後期になると地域社会の階層的分化が進んで、日本全国の各地に群集墳という多数の墳墓が成立する。横穴式石室という画一的な内部構造をもつて、日本列島の大部分が同質化したことを示し、副葬品も須恵器・馬具といった共通する品目が認められる。

6

歴史時代としては、ここで飛鳥時代から平安時代にかけての寺院址をとりあげねばならない。538年あるいは553年が日本に仏教が百濟から公伝した時期とされているが、実際に仏教御藍の建築が始まったのは6世紀末に百濟から遣寺・遣仏・遣瓦の技術者が渡来してからのことである。まず蘇我氏の氏寺として飛鳥寺の造営が行われたと記録にはあるが、その後法隆寺、四天王寺などが相次いで建立され、推古天皇の時には50か寺に近い寺が畿内を中心として存在していたといふ。

市内に新堂廃寺の存在をみると、飛鳥時代寺院址の一つとして、石川谷が漸く当時の文化的先進地帯に遅ればせながら加わったことを示す点で貴重である。古い伽藍遺構はすでに失われていたが、格調高い蓮華文軒丸瓦は百濟伝来の典雅な図案の伝統をうけていることをよく示している。珍しいのは、屋根の隅木先を飾った方形の瓦が出土していることで、異様な鬼面文を型押しで陽刻している（裏表紙）、新堂廃寺の本来の寺名はわからないが、寺址のすぐ上には「オガソジ」池という名がある。藤澤一夫氏はこのオガソジに鳥舍寺の字をあてて考えれば、飛鳥時代の寺院の源流となった百濟の地に建てられていた「北岳鳥舍寺」の寺名を襲ったものと解することができるといふ。



図-13 宮前山第1号墳の組合せ横口式石棺（移築前）



図-14 宮前山第1号墳の組合せ横口式石棺の正面（移築前）



図-15 宮前山第3号墳の横口式石室出土状況



図-16 錦織廃寺出土の複弁蓮華文軒丸瓦



図-17 錦織廃寺付近出土の磚破片 左右18.2cm 厚さ4.9cm



図-18 板持3号墳埴丘南塗出土の骨蔵器 全高約30cm
大阪府教委写真

一方では、この時代は後期古墳の終末期として、石川谷の各地に多くの古墳の分布をみた。市内のお龜石古墳はその典型的な例といふべく、同時に上記の新堂寺と深い関係を有していたことは後節で述べることにする。

当時、寺院をまず造建したのは畿内の有力豪族であった。朝鮮半島からの新しい文化を攝取するとともに、自分たちの信仰の帰依するところとして建てた氏寺であったといえる。官寺が創建されて、國家仏教が確立するようになるのは、もう少しのちのことである。豪族たちは寺院を建てるとともに、終末期の古墳を築造した。

新堂寺とお龜石古墳に似た例は、錦織の羽曳野丘陵東縁にある古墳でもみられた。内部はまだ十分に発掘調査されていないが、花崗岩の切石を用いた横穴式石室をもつ円墳で、壇の破片が沢山出土した。

埠は本来寺院の基壇や床面に敷くものとして日本に伝えられた一種の煉瓦である。この古墳からは同心円の叩目が表裏両面に打捺され、青黒色の硬質に焼成されたものが出て、おそらく石室の床に敷かれたと推定されるとともに、奈良前期（白鳳）という7世紀の年代をきめる手がかりとなった。

これと全く同じ埠の破片が、古墳の東方の台地上にある細井寺跡と錦織廃寺（図-17）から採集されている。錦織廃寺ではまだ平安時代ごろの軒丸瓦しか採集していないが、細井寺跡からは川原寺式の複弁蓮華文系に属する軒丸瓦が出土していて、埠と同じ奈良前期の寺院であることを裏付けた。

奈良時代にはこの地は錦部郡と記され、別書には百濟郷という集落が付近にあったことを伝えている。すなわち、ここに百濟より移住の外来系氏族として古くから錦部氏が居住していた事実を示すものにはならない。これらの寺院は錦部氏の本拠に建てられて信仰と崇敬の中心となり、氏の長のために古墳が營まれたと考えられる。

これら渡来系の有力氏族を配下としたのは、大化前代では蘇我氏であった。佐備川の奥、竜泉に今も法燈を伝える竜泉寺が、かつて蘇我氏一族と因縁のある名刹であるというのも、石川谷の一角に河内飛鳥の地名が残っていることと関係がある。竜泉寺の寺地からは奈良前期から始まり、平安時代にわたる古瓦が出土している。

記録のないところは、遺跡がよく歴史を物語る。この地域社会に住むわれわれにとって、土地に刻みつけられた歴史が埋蔵文化財であることを認識したい。その価値を損うことなく保存し、次代に伝えていくことはわれわれの現世代に課せられた重要な義務であるといえよう。

錦織遺跡

市内で最初に発見された縄文前期の遺跡で、これまで縄文土器や石器などの石器を採集している。近鉄長野線淹谷不動駅の北北東に位置していて、国道170号線の西側の南北300m、東西200mの楕円形に遺物が散布している。地形的みると石川の左岸に臨む低い河岸段丘上にあたっていて、標高は約75mはあるが、石川の河床との比高差は20mほどにすぎない。

遺跡はまだ正式な発掘調査が行われていないため、どの程度の文化層が残されているのかよくわからない。しかしあつて遺跡の付近に東西方向の排水用暗渠が掘られたとき、赤褐色の砂礫層上に縄文土器片を含む黒色の有機質土層が薄く認められる部分があったから、散漫な文化層の堆積があることは確実である。

遺跡から出土した資料の中では、復原されたものとして高さ31cmの深鉢形土器(図-20)が重要で、ほかに破片も数多く採集されている。これらの土器はすべて縄文時代前期に属し、各種の縄文と爪形文をもち、茶褐色から暗褐色を呈している。土器形式の上からいうと、北白川下層II・III式と大歳山式を含んでいる。北白川下層式というのは京都市の北東部にある北白川小倉町の遺跡で、大歳山式は神戸市垂水区大歳山遺跡から、それぞれ出土した土器に共通する要素をもつ土器という意味である。

ほかに凹基無茎式の三角形をしたサスカイト製の石器が十数個あるほか、同じ縄文時代のものとみてよいサスカイトの打製石斧(長さ8.3cm)も表面採集されている。

市内ではこのほかに、石川をさらに1.5km遡った石川右岸の河岸段丘上に伏見堂遺跡、その東方の巌山を越えた竜泉と甘南備との間の谷奥にある佐備川遺跡、羽曳野丘陵南端の西麓に位置する寺池遺跡などがある。いずれも土器が未採集のため時期を決定することはできないが、多数の石器の型式からみて縄文時代に属する遺跡と考えられる。

錦織遺跡のように石川を遡った縄文遺跡については、下流の石川と大和川の合流点にある藤井寺市国府で、大規模な縄文前期の集落遺跡があることを併せて理解しなければならない。おそらく当時の縄文人は狩猟と食糧採取のために、この金剛山麓の錦織台地へと、石川を遡って進出したのであろう。前期は放射性炭素による年代測定では、今から約5千年前と考えられている。大阪府下の数少ない縄文遺跡として、貴重な存在といえよう。



図-19 東南方向からみた錦織縄文遺跡全景



図-20 錦織遺跡出土の深鉢形縄文土器 高さ約31cm 富田林高校

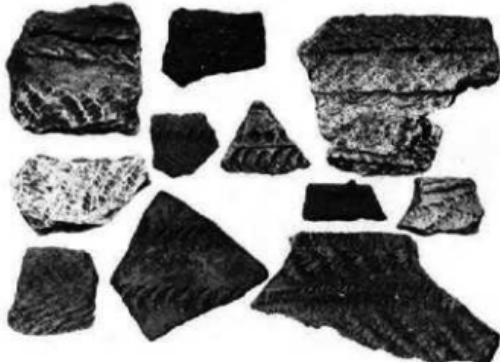


図-21 錦織遺跡出土の縄文土器片

喜志弥生遺跡

石川中流域の西岸にある弥生時代中期の集落遺跡としては大規模なもので、いま喜志小学校のある喜志町から木戸山町にかけての市内の地域と、その北方の羽曳野市東阪田一帯にわたって遺物が散布している。

遺跡の存在が学界に注目され始めたのは、1910年代のことであるが、まだ大規模な学術上の発掘調査は行われる機会がなく、小範囲の試掘調査が実施されているにすぎない。ただその調査を通じてみても、円形あるいは方形に柱穴を配置した竪穴住居の造構と、その間にV字状の浅い溝をめぐらしていることが確かめられていて、石川流域の河岸段丘上に位置する重要な集落遺跡ということができる。

遺物としては櫛搔（くしがき）文を施した壺形土器や、高杯（たかつき）、甕（かめ）、鉢など多様な土器と、石包丁、石剣、石槍、石斧、皮剣、石鎚、石錐などの石器が採集されている。この遺跡の特色としては、サスカイト製の打製石器が非常に豊富に出土することで、東方3°のところに、サスカイトの原石を大量に産出する二上山があることと深い関係がある。かつて打製石器が多いことを理由として、喜志遺跡を石器製造の工房址かと考えたことがあるが、北方の大坂平野の中央に位置する瓜生堂遺跡に打製石器が乏しいことと比べると、対照的な傾向といわねばならぬ。

しかしこの集落でも農耕が行われていたことは、収穫用の農具として石包丁が使われていたことからも明らかで、台地周辺の低湿地が水稲栽培用の水田として利用されたことであろう。

灌溉に便利な低湿地が少ない石川谷に、弥生中期になって弥生人が進出し、集落を形成して定住生活を営んだ事実は、たいへんおもしろい問題を提起している。近年、大阪平野とその周辺の弥生集落の調査でわかってきたのは、前期末から中期にかけて大洪水などの異常な気象条件で、当時の集落が押し流されたり、厚い土砂の堆積の下に埋まってしまったという現象である。このため集落がそのまま中絶してしまっている場合もあって、喜志遺跡が中期になって集落を形成した理由は、案外こうした大阪平野の自然環境の変化による住民の移動が影響しているのかもしれない。

弥生中期というとちょうど西暦紀元前後の時期にあたり、北九州では倭の奴国が中国の後漢に遣使したのもこの頃のことである。



図-22 喜志遺跡全貌、正面の山は二上山



図-23 喜志遺跡の竪穴住居と遺物の出土状態



図-24 喜志遺跡のV字状溝内の弥生式土器出土状態

中野遺跡

明治25年の『人類学雑誌』に「河内に於ける石器の新発見地」として、この中野の地名が登場する。おそらく市内で最も古く発見された遺跡であろう。採集品は石鏃、報告者は山崎直方という地理学者であった。

その後、この事実は地名表には載せられていたものの、遺跡の実態については調査されることなく80年の歳月が流れた。

1970年になって、中野町の小字星田に温室ハウスが建設されたさいに、遺跡は再び発見の機会に恵まれた。試掘は小範囲にとどまつたが、V字状の溝の中から壺・甕・鉢・高杯などの器形をした弥生式土器の破片が出土し、弥生中期に属する遺跡であることが判明した。文様には櫛描文や流水文、刺突文、円形浮文など各種のものがあり、土器の胎土とあわせていわゆる「河内の土器」と称する地域的な特色を備えたものが多い。

石器も石包丁・石槍・皮剝・敲石（たたきし）といった各種にわたっている。

遺跡の範囲は今後の調査にまたねばならないが、いま中野町の中央を南北に通る東高野街道を西限として、それから東方の石川に臨む台地縁まで遺物の散布を認めるので、東西200m、南北300mの広さをもつ集落遺跡かと推定できる。

弥生式土器の包含層の上には、さらに古墳時代から平安時代にかけての遺物を含む文化層があり、須恵器としては壺・甕・蓋杯、土師器では壺・甕の類の破片を採集した。このことから中野町の一帯が弥生時代から集落として開けていたことが実証でき、引続いて現代にまで及んでいるともいえるわけである。

別の地点での調査によると、敷石遺構に伴なって多数の瓦片を出土した遺構の存在が明らかにされている。瓦類は縄目を印し、糸切り痕を有していて、平安時代後期の平瓦から室町時代の巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦など古代末期から中世に及んでいる。またこれに伴なって当時の食器に供された瓦器（がき）や羽釜形土器の破片も採集されていて、寺院建築が営まれていたのではないかと推定されるが、規模や内容についてははっきりしない。

中期以降の弥生遺跡は、今までの調査によるところ市内南部の高地に移動する。石川右岸の彼方・滝谷遺跡などであるが、丘陵上の高地に集落が移る傾向は周辺の羽曳野市・太子町・河内長野市でも認められていて、後期の弥生社会に共通した要因があつたらしい。



図-25 東南方からみた中野遺跡の全景



図-26 中野遺跡出土の弥生式土器片 壺形・鉢形・その他、および把手破片



図-27 中野遺跡出土の石槍・石包丁など 左端石槍12.8cm

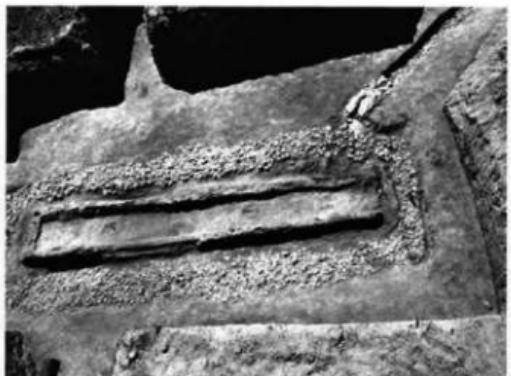


図-28 真名井古墳の粘土桿下半部の全景、粘土桿床と周囲の排水施設



図-29 真名井古墳出土の土師鹿形土器

真名井古墳

いま旭ヶ丘町の住宅地になっている羽曳野丘陵の一・支脈突端にあった前期の前方後円墳である。丘陵の地形を利用して前方部を西北に向けて作り、全長60m、後円部の直径40m、前方部の幅20mという比較的小規模なもので、後円部の高さは5m、前方部は低くて1mしかなかった。かつては十三本松山と呼ばれ、太平洋戦争中に開墾されて埴丘の表面は荒廃していたが、葺石や埴輪は部分的によく残っていた。

発掘調査をしたところ、後円部の中央に埴丘の長軸と平行して細長い粘土桿が設けられていた。粘土桿というのは古墳時代前期から中期にかけての一種の埋葬式で、狭長な木棺の本体を粘土で厚く被覆した構造である。ふつう木棺は長年月の間に朽失して痕跡しかとどめられない場合が多く、古くは粘土棺と誤解された場合もある。真名井古墳では粘土桿内部の状況から、長さ5.3m、高さ約1m、幅0.5mの箱形に近い組合式の木棺がおさめられていたものと想定した。

粘土桿の中央部分は盜掘されていたが、埋葬遺体の頭位と考えられる棺端の外側に、三角縁神獸鏡1面と刀子3・斧2・鎌(やりがんな)3・鉢1その他の鉄製品が一括して副葬されていた。この反対側の足位には鹿形の土師器1個が置かれ、桿の南側の側面に沿って碧玉製輪車3・刀身状器物2・鉄鏃14があった。

三角縁神獸鏡(表紙写真)は三神三獣獸帶の鏡式に属する中国鏡で、重厚な精品である。興味があるのは、同じ鏡型で作られて同時期に舶載されたと考えられる銅鏡が、奈良県新山古墳とはるか離れた群馬県柴崎古墳からそれぞれ発見されていて、中国から鏡入手した中央の有力豪族が、これら各地の豪族にそれぞれの鏡をかつて分与したという支配関係を推定する上で、重要な一例とみられている。

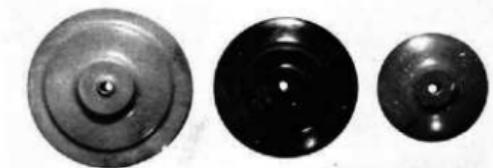


図-29 真名井古墳出土の碧玉製輪車 左輪直徑5.9寸 大阪大学



図-30 真名井古墳出土の鐵鏡・刀子・鐵錐
右端鐵鏡14.3寸

板持古墳群

富田林市の東部にあって、石川の支流の佐備川と宗奈田川に挟まれた板持丘陵は、古墳の分布の最も濃密な地域の一つであった。その突端には古く神獣鏡を出土した板持丸山古墳（図-8）があり、埴輪を配列した小型の前方後円墳などもあった。その総数は前方後円墳1、前方後方墳1、円墳4の各基であったが、この30年間に板持丘陵が重点的に開発された結果、これらがことごとく姿を消すという結果になったのは、文化財保存の精神からいってたいへん残念なことといわねばならない。

丘陵の最奥部に位置する2号墳と3号墳について説明すると、2号墳は直径15m、高さ2.5mの円墳で、3号墳はこの南東方約100mのところにあった全長40m、後方部の一辺約25m、前方部の幅15mという珍らしい前方後方墳の形状をもつものであった。

2号墳は葺石・埴輪のない後期古墳で、南北に長軸をおいて箱形の木棺を直葬していた。副葬品としては棺内に鉄刀子1口をおさめ、棺の頭端部に杯身4、蓋杯の蓋2、土師質壺1を雜然と重ね、周辺に土製丸玉約40個が遺存していた。また封土の中から器台、甕、杯などの須恵器片が多数出土した。

3号墳は2号墳に比べると年代が遡るにもかかわらず、やはり墳丘に葺石・埴輪を欠いていた。後方部の中央に墳丘の長軸と平行して東西方向に長方形の墓壙を穿ち、床面には青白色良質の粘土で棺台を設けて、その上に木棺を置いていた。ただし木棺は全く朽失していたから細部の構造はわからない。

副葬品はすべて棺内におさめられていたもので、遺体の頭位とみられる西端に近いところに、粗末な櫛齒文を鋤出した小鏡を置き、鉄劍2が両側にあった。これから脚部にかけて短剣、鉄刀子、鐵鎌、鐵斧および銅鏡が數群にわかれて配置されていた。

この3号墳は遺物の品目に年代の幅のある新旧の内容のものを含んでいるが、内部構造からみて5世紀代の前半の時期を推定すべきであろうか。これに対して2号墳は副葬されていた須恵器から6世紀代という点は動かない。

なお古墳そのものと年代的に相違して関係のないものであるが、3号墳の墳丘の南側裾に、奈良時代の骨蔵器と考えられる、須恵質の壺と杯を組み合わせて埋葬した遺物を見出した。おそらく火葬骨をおさめたものであろうが、内部に遺骨は残っていなかった。



図-32 板持3号墳(前方後方墳)の墓壙と粘土棺床



図-33 板持2号墳の墓壙と木棺直葬の状況および遺物の配列

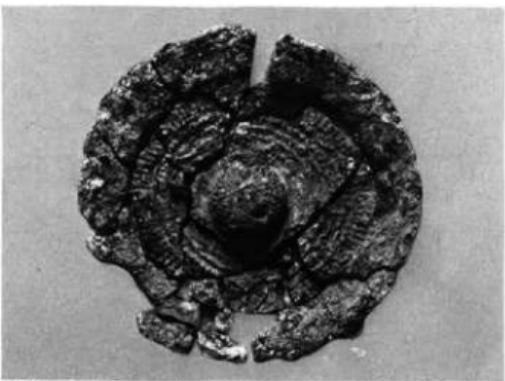


図-34 板持3号墳出土の櫛齒文鏡 面径83mm 大阪府教育委員会



図-35 田中古墳群の横穴式石室内部

田中古墳群

掛山より西北西方に派生した丘陵上に位置し、標高約120mを測る。眼下には西野々古墳群が点在し、南方の西斜面には23基からなる横穴式石室を内部構造とする掛山古墳群がある。田中古墳群は5基の円墳で構成されていたが、その中の3基が宅地造成に伴ない発掘調査が実施された。調査された3基は径25mに満たない円墳で両袖式の横穴式石室が構築されていた。

1号墳は現在墳丘・石室の一部が破壊されたまま放置されており、現状での墳丘の高さは約4.5m。石室は全長10.5mと長大で、玄室長5.5m。羨道長5mを測る。玄室・羨道の床面には礎床施設があった。副葬品としては石室内部より鉄地金銅張馬具・辻金具・杏葉・鉄刀片・鐵鏡・須恵器高杯・疋・壺・蓋・装飾付壺残欠などがある。2号墳は石室全長7.5m、

玄室長3.2m、羨道長4.3mを測る。玄室内には須恵器壺破片・近世素燒土器がある。なお、石棺蓋は富田林市立第2中学校校庭に保管されている(図-10)。3号墳は石室全長8.5m、玄室長3.8m、羨道長4.7mを測る。玄室平面は扁平な石で二分し、羨道と玄室の取りつきの平面にも板状の凝灰岩が立てられ、羨道と玄室を区画していた。石室内の側壁は比較的垂直に整えていて、床面には礎を敷きつめ、石室中央を羨道に向ってのびる排水溝が構築されていた。石室内部には凝灰岩製の石棺破片が残り、2号墳と同様に石棺を主体としたものであろう。出土遺物には須恵器壺破片若干、近世土器片若干の他、石製の扉がある。4号墳は最も高所に位置し、径約30m、高さ約5mを測る。石室長は9.15m、玄室長4.25m、幅1.55m、高さ1.6m、羨道長4.9m、幅1m、高さ1.5mを測る左片袖式石室である。比較的保存のよい規模の大きい盟主墳的な性格をもつ古墳である。5号墳は径9m、高さ2.5m内外の円墳である。墳丘には花崗岩石材が露出しており、横穴式石室であろう。

これら田中古墳群はおよそ古墳時代後期の6世紀後半頃に築造されたものと推定される。



図-36 田中古墳群出土の遺物 上段：須恵器、左より壺・疋・高杯・蓋(2個)
下段：鉄地金銅張馬具残欠(杏葉・雲珠など)

五軒家・中佐備須恵器窯跡

市内では東西両端にわかれた位置にあるが、いずれも須恵器と称する土器を焼成した遺跡である。須恵器は五世紀中葉に朝鮮半島から土器の製作技法と焼成技術が伝わったもので、古墳時代後期には在来の土師器（はじき）と並んで広く普及した。灰青色の甚だ硬質の土器である。

五軒家窯跡は狹山町に近い羽曳野丘陵の西縁にあり、この種遺跡は西方の狹山池周辺だけでなく、堺市東南部にあたる光明池・和田・美木多・高藏・梅地区にかけて、総数600か所余の窯跡が群集していて、陶色古窯址群と呼ばれているところから、いわばその分布圏の東端にあたるものとみることができる。

窯跡は小谷に沿った南斜面に當まれ、まだ発掘調査を行っていないので構造はわからぬが、斜面に穿たれた登窯であることは確實である。ふつう登窯は長さ12~3m、幅、高さともに1m内外のトンネル状をしたもので、下方の焚口に松の燃料を投げ入れ、途中の焼成室に沢山の土器を並べていて、上方には焼き出しの穴が設けられている。五軒家窯跡の付近からは杯・蓋杯・壺・高杯・提板・短頸壺などの器形の破片が採集されている。

中佐備窯跡は千早森屋狹山線の道路が佐備丘陵を横切るすぐ北側の東斜面にある。ちょうどみかん山として開かれた中腹にあたり、五軒家と同様に未発掘のため、構造はわからぬが、東方に開口する登窯と推定される。いま農道によって焚口前方の灰原らしい箇所が断ち切られていて、灰まじりの真黒な土に須恵器片が混っている。器形は甕・壺・高杯・蓋杯など多様である。この地点が小字を臺燒といい、近接して金クソという地名も残っているのは、古くから窯跡の存在が伝えられてきたのか、土器片の散布に後世氣付いたことによるのか明瞭ではないが、地許での埋蔵文化財認識の一例としておもしろい。

須恵器は市内の後期古墳からも広く発見され、最もありふれた遺物として年代を決定する資料を豊富に提供する点で貴重である。焼成温度が1100度内外という高温で焼かれていたため、甚だ硬くて重宝な土器であったと考えられる。五軒家窯跡・中佐備窯跡は焼成土器の器形がもつ特徴からみて、西暦6世紀代に属するものといえる。当時佐備川を遡った山麓地帯にも土器生産の技術が定着した例として中佐備窯跡の存在は貴重である。



図-37 中佐備窯址出土の須恵器・蓋杯・高杯・壺の破片



図-38 北甲田遺跡出土の須恵壺 腹径13.8cm 水都庸皓氏



図-39 北甲田遺跡出土の須恵蓋杯の壺 直径14.9cm 水都庸皓氏



図-40 お亀石古墳の石室兼道部正面の状況



図-41 墓頂からみたお亀石古墳の石棺蓋の形状と兼道の天井石



図-42 お亀石古墳の家形石棺と周壁の瓦積遺構

お亀石古墳

緑ヶ丘町のすぐ上に谷口を仕切って作られたオガニ池がある。後述する新堂庵寺と瓦窯が分布している場所であるが、この池に臨む北側の丘陵上にお亀石古墳がある。羽曳野丘陵の一支脈が、南に向って傾斜した屋根筋の上部に営まれた直径15m、高さ3mの円墳である。周辺は随分と開発されてしまったが、この一画だけは雑木林がよく残って、羽曳野丘陵の昔のおもかげを僅かにとどめている。

円墳の中央に天井部の露出した横穴式石室があって、もとは2個の天井石を並べていたらしいが、いまは奥側の1個だけを載せて黒くなった花崗岩で、なかなか巨大な石塊である。

石室は通常のものと異なって玄室がなく、兼道（せんどう）という入口部分に接して、大きな家形石棺だけが安置されている。家形石棺は屋蓋形の蓋石と箱形の身とを組み合わせた後期古墳の典型的なタイプだが、兼道に向いた正面に横長の長方形の口が開いていて、それに挿入する石栓も完存しているのが珍らしい。この特色から横口式家形石棺といい、玄室の構築を省略した終末期の葬法として、石棺と兼道を完成したのちに遺体を納めるための工夫として生じたものであろう。石川谷周辺にこの種の古墳が特に多いが、お亀石古墳では石棺の蓋に6個の縄掛突起をまだ作り出しているところに型式の古さが感じられる。

重要なことはこの石棺の周囲に、本来は寺院の屋瓦として利用する飛鳥時代の平瓦を壁のように積み重ねていたことであった。この平瓦と同質のものは、丘陵の飛鳥時代寺院址の新堂庵寺にも用いられていたのである。当時の寺院建立は百済（くだら）から渡米した最新の技術の採用であり、新しい思想としての仏教への帰依に外ならない。新堂庵寺を創建したのは石川谷のこの地に本拠をおいた豪族であり、同じ瓦を使用したお亀石古墳はその豪族の墳墓と考えられる。

お亀石古墳は古くから開口していて、雨乞（あまごい）の対象として祀られたこともあったらしい。從って石棺の中や周囲に、どのような副葬品がおさめられていたのかということは明らかにすることはできない。ただし石棺の周囲の飛鳥時代の瓦を手懸かりとして、7世紀初頭の年代に属することはわかる。兼道部の石室に切石造りの花崗岩を使用した点でも、太子町叡福寺にある聖徳太子磯長墓とほぼ同時期のものとして、市内の遺跡では最も重要なものの一つであろう。

新堂廃寺

現在、緑ヶ丘町の住宅地中央に運動場まがいの広場が残されている。これが府下で四天王寺などと肩を並べる飛鳥時代の寺院址、新堂廃寺の寺地である。この地は小字を「堂ノ前」といい、昭和初年に採集された古瓦をもとにして、石田茂作博士が飛鳥時代寺院の一例としてとりあげるに及んで、漸く注目されるようになった。

ところが当時は羽曳野丘陵の東縁に沿う低い台地上の水田となっていたため、地下の遺構については全くわからなかった。1959・60年の兩年度に発掘調査を行ったところ、おびただしい飛鳥時代とそれ以降の瓦とともに、基壇遺構の一部が判明した。基壇というのは建物を建てる場合の基礎施設のことで、石造・瓦積・埴（煉瓦）積の三種があるが、ここでは瓦積基壇が残っていた。

ただその基壇の年代は奈良時代という新しいもので、飛鳥時代創建の古い基壇はのちに整地、削平され、奈良時代に改めて再建されたことも確かめられた。この伽藍配置は、南北に並ぶ3つの基壇からなり、最も南側のものを塔址と推定すると、中央は金堂址となり、北側は講堂址という南面した四天王寺式となる。塔址の基壇は一辺13.4m、金堂址は東西15.9m、南北14.1m、講堂址は南北14.2mで奥行はわからない。さらに塔と金堂の西に南北27.6m、東西16.4mの細長い建物基壇があったが、この内容は不明である。

出土した屋瓦の中にも、飛鳥時代に属する数型式の素弁蓮華文丸瓦（図-44、上段）があり、統いて白鳳時代の山田寺式の単弁瓦（同図下左端）、川原寺式の複弁瓦（同図下中央）、さらに天平時代の複弁瓦（同図下右端）、鎌倉時代の巴文瓦など典型的な型式をよく揃えている。これに伴って軒平瓦も白鳳時代以降の重弧文、唐草文、珠文などがある。また飛鳥・白鳳期にかけては、軒下の垂先（たるきさき）に円形の蓮華文瓦を鉄釘で打ちつけた例があることもあげておこう。



図-43 新堂廃寺の瓦積基壇



図-44 新堂廃寺出土の各種軒丸瓦 上段、飛鳥時代 下段、白鳳・天平時代



図-45 御観寺池瓦窯の全景



図-46 御観寺池瓦窯内部の瓦片堆積状況



図-47 竜泉寺西方硯石出土の骨蔵器

全高26.8cm

御観寺池瓦窯と竜泉の骨蔵器

御観寺池は前記のお龜石古墳と新堂廃寺とのちょうど中間にある溜溉用溜池で、正しくは片仮名で「オカンジ」と書くべきものようである。瓦窯は池の東北隅にあり、丘陵の南麓に南向きに開口する登窯として作られていた。長さ約5m、内部の副は最も広いところで約2m、北端の煙出しのところは狭くなっている。床面は13度の勾配をもっている。床は無段式である。

1969年に発掘調査したところ、床面には奈良後期（天平期）の瓦片が厚く堆積し、窯壁の補修した部分には奈良前期（白鳳期）の瓦片を使用していたので、7世紀後半に始まり8世紀末に至る約100年間使用されたものと判明した。この瓦が新堂廃寺の建物の葺替に供されたことはいうまでもない。

焚口に続く燃焼室がコストル構造に改築された形跡が認められること、奥壁に縦に2条の煙道が平行して穿たれていて、その表面を完形の丸瓦と平瓦でおおう工夫をしてあるなど、興味のある遺構があった。

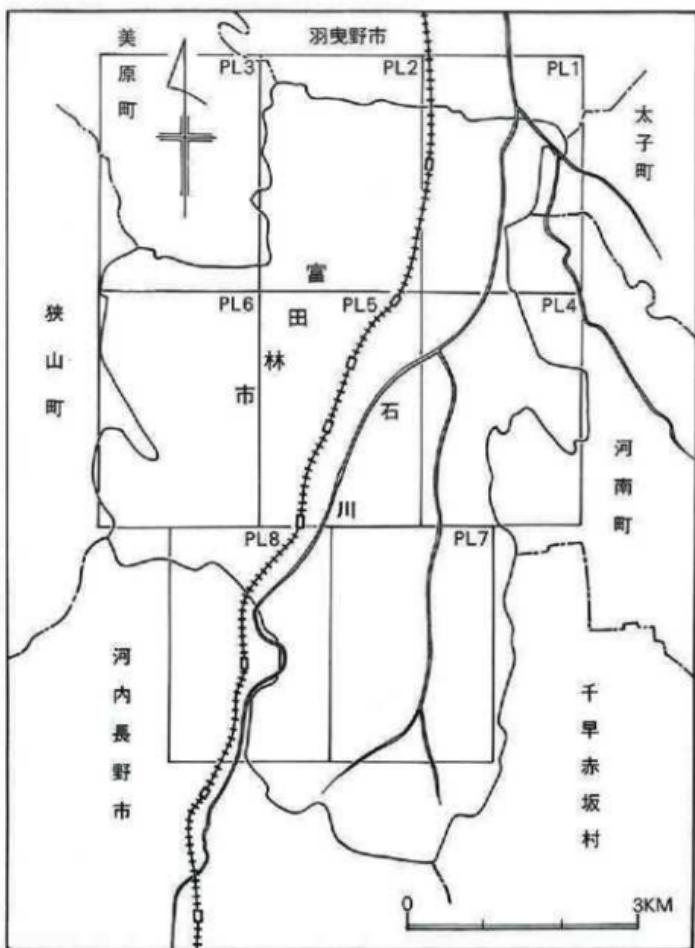
この谷の付近にはまだ瓦窯らしい遺構もあり、寺に付属して工房が営まれていたことを思わせる。ただ創建時の飛鳥時代の屋瓦については全く破片の散布を見ないので、別の地域で焼成された製品が運ばれてきたのかもしれない。今後の課題とすべきものであろう。

竜泉の骨蔵品は、竜泉寺の西側にそびえる巣山と金胎寺山の中腹から発見された。青灰色をした硬い須恵器の壺形土器で、宝珠形のつまみのついた蓋がかぶせてあった。壺は高さ24cm、口径13cm、胴径25cmで、大きな2個の壺（かめ）形の須恵器を合せ口にした中に納められていたらしい。土器の中には炭の混った灰が漬されていて、火葬した遺骨を入れたものと考えられる。

わが国で火葬が始まったのは西暦700年に僧道昭の時と『続日本紀』に記されていて、仏教が伝来して1世紀半のちの頃からとみられる。平城京に遷都する直前である。奈良時代には天皇をはじめとする貴族、僧侶の間で火葬が流行したが、いっぽうではまだ土葬も多かったことはいうまでもない。火葬骨を埋葬するさいに、被葬者の名前や位階・功績を記した墓誌を納めることもあったが、この竜泉の骨蔵器ではその例はなかった。市内ではこのほかに、大伴や板持あるいは旧毛人谷（えびたに）の地域でも骨壺が出ている。竜泉の骨蔵器は型式からみて平安時代前期ごろと考えられる。

富田林市埋蔵文化財遺跡分布図

富田林市埋蔵文化財分布図索引



遺 踪 分 布 図 地 区 割 図

〈凡例〉

- ①遺跡分布図は富田林市内の埋蔵文化財包蔵地域を8枚(PL.1~8)に分割したものであり、嶽山古墳群については更に拡大分布図(PL.9)をもって示している。
- ②遺跡分布図の色分けは次のようにある。
 - …墳墓 ■…集落址(遺物散布地を含む)
 - …寺院址 ■…窓跡
- ③遺跡一覧表の対照番号は遺跡分布図の番号と、また文献欄の番号は参考文献一覧表の番号と一致する。
- ④遺跡一覧表の遺跡の規模・範囲の欄では北をN、南をS、東をE、西をWと表わす。
例えばN-S100mとあれば南北100mの意味である。
- ⑤見開きの右ページに掲げた遺跡分布図の説明は、左ページにおいて遺跡一覧表の同一対照番号で示してある。

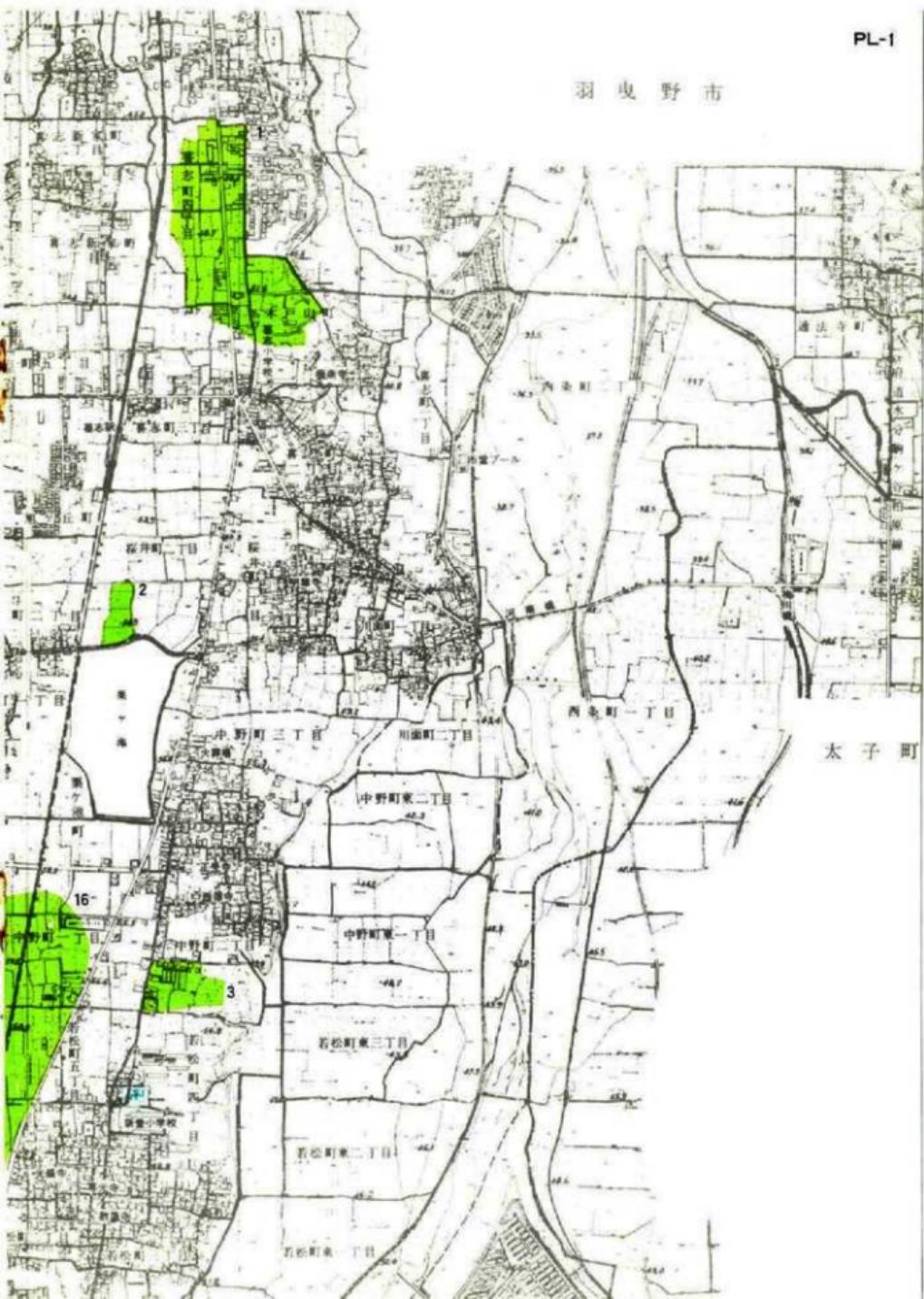
PL-1 遺跡一覧表

対照番号	遺跡名 (所在地)	種類	立地・地目	所有別	規模範囲	遺構・遺物	時代	文献
1	喜志遺跡 (喜志町4丁目・木戸山町施)	集落址・石器製作址?	台地上・耕作地	民有地	S-N500m・ E-W200m	縄文式住居・弥生土器・石器・石點 ・石鍬・石鎌・石小刀・石劍・石槍 ・石包丁・片刃抉入石斧・手持ち石 ・土師器・須恵器・その他管玉・ 勾玉の出土を伝える。	弥生時代～古 墳時代	(518) 6819 (2906) 40)
2	栗ヶ池遺物 散布地(桜井町2丁目)	遺物散布地	台地上・耕作地	民有地	S-N150m・ E-W80m	サヌカイト・須恵器		
3	中野遺跡 (中野町2丁目)	集落址	台地上・耕作地	民有地	S-N110m・ E-W180m	弥生土器・石器・石包丁・土師質長 頸器	弥生時代～中 世	40)



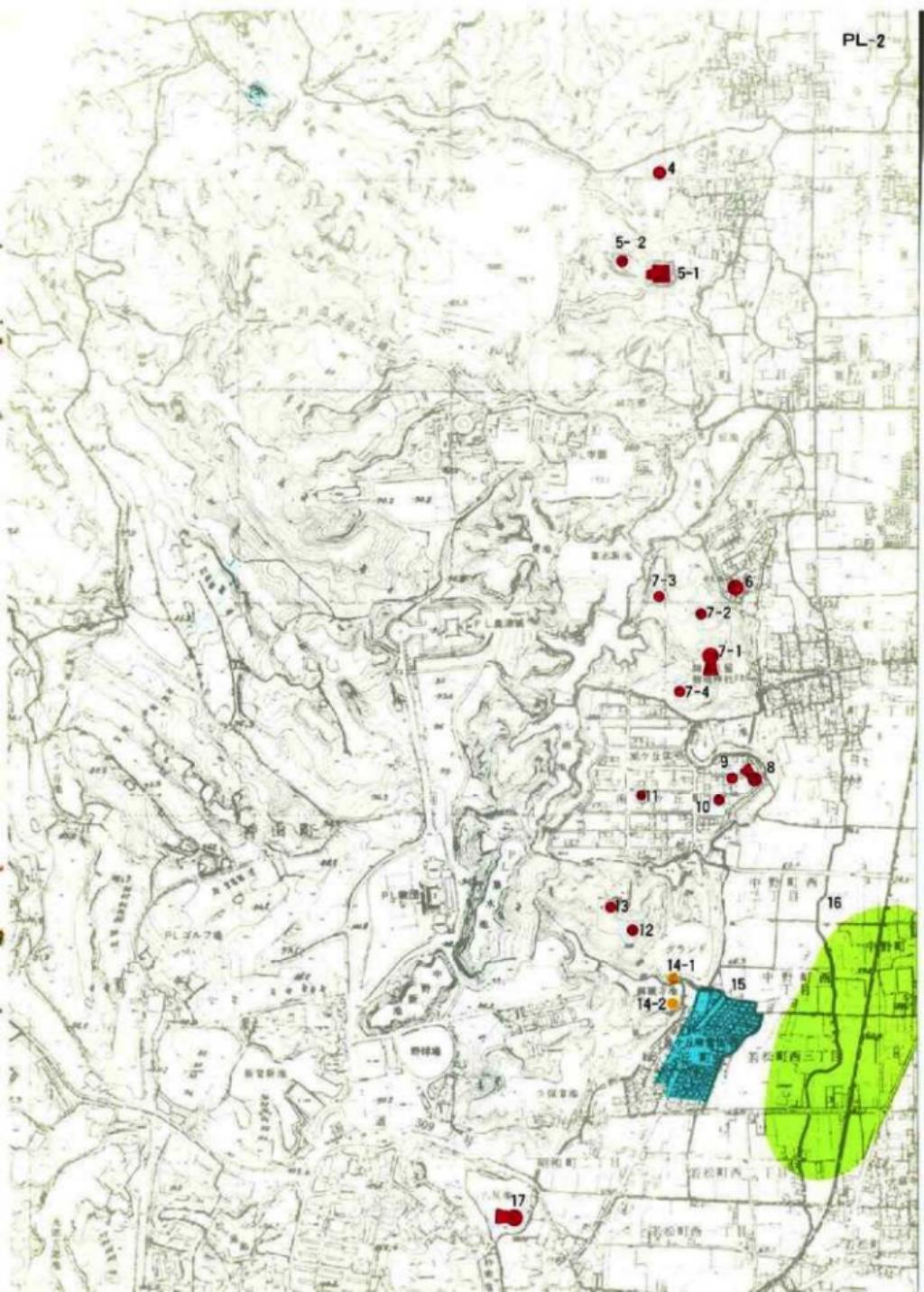
図-48 喜志遺跡出土の弥生式土器

羽曳野市



PL-2 遺跡一覧表

対照番号	遺跡名(所在地)	種類	立地・地目	所有別	規模範囲	遺構・遺物	時代	文献
4	茶臼山古墳 (平野町2丁目)	円墳	丘陵上・山林	民有地	痕跡のみ留める。	須恵質輪・提瓶・蓋・壇	古墳時代後期	44
5-1	平第1号古墳 (志高16 4)	前方後方墳	丘陵上・山林	民有地	全墳・全長50m・後方部 →辺30m・前方部長20m	木棺直葬・器台1・無蓋高杯3・子 持器台1・錫杯1・愛1・土師質壺 ・四耳壺1・鉢形・合付長頸甕2・ 銅製耳飾残欠・有蓋1・火葬盤・ 小壹1・提瓶・壺1・有蓋高杯4	古墳時代後期 (6世紀後半)	888D
5-2	平第2号古墳 (平野町2丁目)	円墳	丘陵上・山林	民有地	全墳・径20m	木棺直葬・提瓶・無蓋高杯・陶平底甕	古墳時代後期 (6世紀後半)	49
6	鶴塚古墳 (宮町3町 目)	円墳	丘陵上・山林	民有地	全墳・径30m	土罐・円筒埴輪判・溝状造綱・鏡・鑑 ・有孔石製品・石製刀子・須恵器・六脚 鏡・短甲・側面形埴輪・柳葉式鉢瓶27	626D 628D 628H	
7	宮神社裏山 古墳群(宮 町2丁目)							33H
7-1	第1号古墳	前方後円墳 ?	丘陵上・山林	民有地	全長58m・後円部径40m ・前方部幅4.8m・前方部 高3.3m	円筒埴輪・側面形埴輪	古墳時代前期	
7-2	第2号古墳	円墳	丘陵上・山林		完存・径7m・高さ1m	墳丘西側に幅約2.5mの手掘状空濠 を有する。	古墳時代	
7-3	第3号古墳	円墳	丘陵上・山林		完存?・径17m・高さ2.5m		古墳時代	
7-4	第4号古墳	円墳	丘陵腹・果樹園	民有地	平墳	横穴式石室・附近で龟甲形陶片が 採集されている。	古墳時代後期	66
8	真名井古墳 (新宝2604)	前方後円墳	丘陵上・山林	民有地	全墳・全長60m・後円部 径40m・前方部幅20m・ 後円部高5m・前方部高 1m	組合式本棺を内部主体とする粘土椁 ・平縁の鏡片・碧玉製管玉2・土師質壺 ・土器・三角縁三神三足鏡1・鏡・鑑 ・刀子・有孔形鐵斧・短冊形鐵斧・鐵鏡 15・刃身狀利器・碧玉製鐵車	古墳時代前期 (4世紀末)	652D 653D 613A 613B
9	宮前山古墳 第1号古墳 (南道ヶ丘町)	丘陵腹・果樹園	民有地	全墳		丸石積曲壁造構・砂岩製組合式横口 式石棺・須恵質長颈甕・石棺は大阪 大学に移築されている。	古墳時代後期	634H
10	第2号古墳 (南道ヶ丘町)	丘陵腹・果樹園	民有地	全墳		横穴式石室	古墳時代後期	44
11	第3号古墳 (南道ヶ丘町)	丘陵腹・果樹園	民有地	全墳		横口式小石室・土師質土器・その他宮 前山丘陵上から方形埴輪が出土している。	古墳時代後期	44
12	お龜石古墳 (中野)	円墳	丘陵腹・荒地	民有地	径15m・高さ3m	凝灰岩製形横口式石棺の前面には 後縫を附し、石棺の周囲には幾島時代 の平瓦を積み上げ都室壁面を構成 する。石棺も遺存。	古墳時代後期 (7世紀前半)	1114 0282 0301 0346
13	中野古墳 (中野)	円墳?	丘陵上・山林	民有地	埴頂部に竪掘穴。	お龜石古墳の附近にあった石棺が武山 池の底の蓋に利用されていると言う。	古墳時代後期	66
14-1	御腰舟池第 1号瓦窯 (中野369-1)	瓦窯址	丘陵腹・池塘下	民有地	全長498cm・最大幅215cm ・最小幅91cm・底面傾斜 13度	登窯・複弁蓮華文軒丸瓦・平瓦・九 瓦・籽平瓦	奈良時代前期 (白鳳)	44
14-2	御腰舟池第2号 瓦窯(中野)	瓦窯址	丘陵腹・池塘下	民有地	完存	登窯・繩目・印目窓をもつ平瓦	奈良時代後期 (天平)	
15	新堂庵寺 (緑ヶ丘町)	寺院址	台地上・耕作地	府有地	NE-SW220m・ NW-SE100m	亂石積基壇・瓦積基壇・金堂・塔・西方 建物・北方建物・複弁蓮華文軒丸瓦・ 單弁蓮華文丸瓦・重弧文軒平瓦・均齊 唐草文軒平瓦・巴文軒丸瓦・殊文軒丸 瓦・鰐尾破片・鬼面文隅木先拂瓦・植 先拂瓦・土師質圓形土器片・笠状土製 品・鉄釘・蓮華文円板状土製品・留金 具・金銅金具・青磁片・平瓦瓦	飛鳥時代一説 奈良時代	0102 034D
16	新堂遺跡 (中野町一丁 目・若松町西 一丁目他)	集落址	台地上・耕作地	民有地	NE-SW700m・ NW-SE400m	弥生土器・石器・石棺・土鍤・瓦・ 石帶・サスカイト	弥生時代~	
17	六反池古墳 (神山町)	前方後円墳	丘陵上・山林	民有地	全長約60m	円筒埴輪	古墳時代	



PL-3 遺跡一覧表

対照番号	遺跡名 (所在地)	種類	立地・地目	所有割	焼損範囲	遺構・遺物	時代	文献
18	五軒家遺物散布地（五軒家）	遺物散布地	丘陵腹・造林園	民有地		石槍・北北西方約450mで有舌尖頭器が出土している。	弥生時代	038D
19	五軒家須恵窯跡（五軒家）	須恵器窯址	丘陵腹・耕作地	民有地		蓋杯・高杯・盤	古墳時代後期	



図-49 五軒家出土の打製石槍

美原町

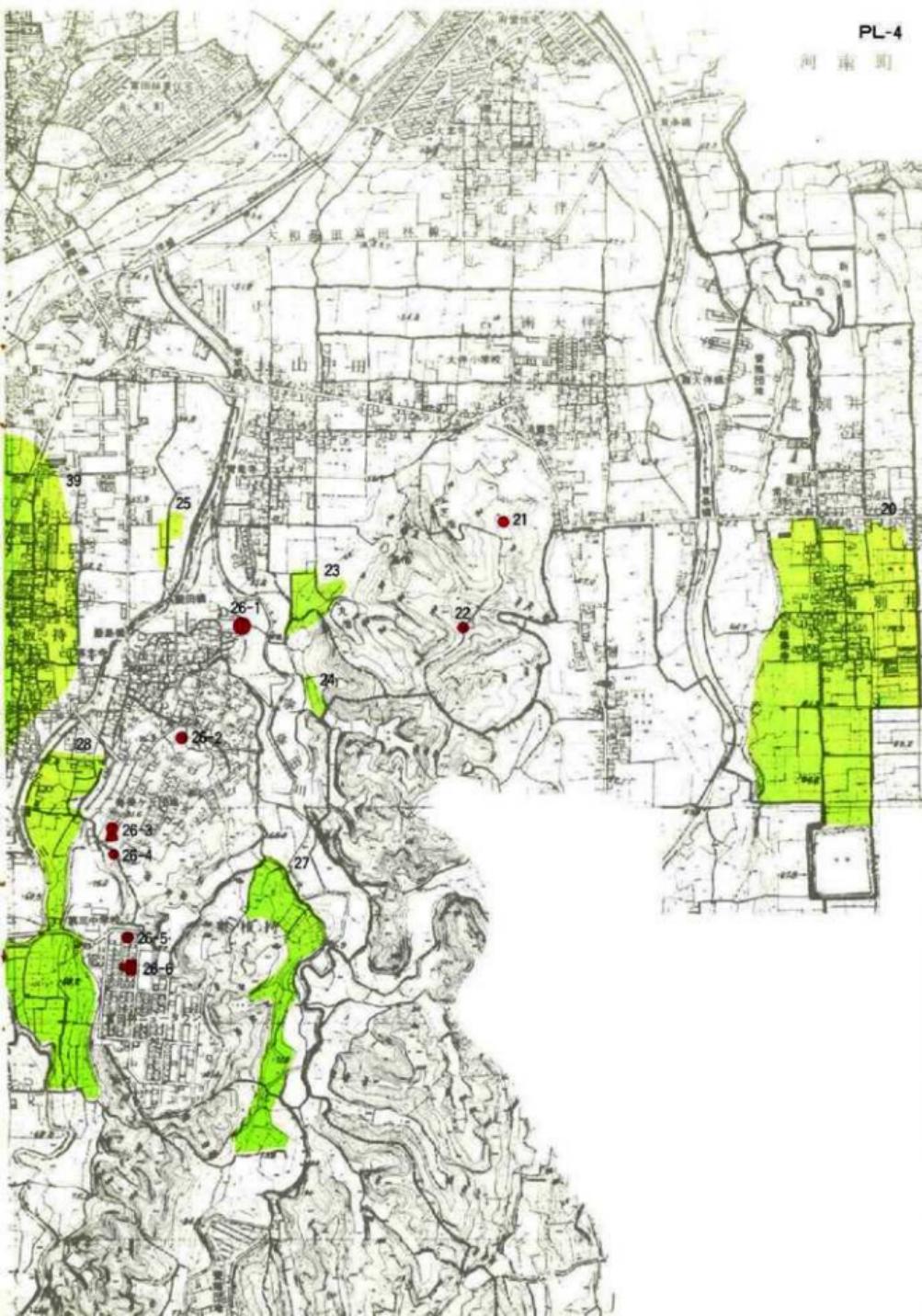


PL-4 遺跡一覧表

対照番号	遺跡名(所在地)	種類	立地・地目	所有別	規模範囲	遺構・遺物	時代	文献
20	南別井遺跡 (南別井他)	集落址	台地上・耕作地	民有地	S-N 700m・ E-W 400m	弥生土器・石鏡・石棺・サスカイト・須恵器・瓦	弥生時代~	
21	西大寺山北古墳 (南大伴)	円墳	丘陵上・荒廃地	民有地	全墳・径 9m・高さ 2.5m	附近には 2 乃至 3 基の古墳があったらしい。	古墳時代	1600
22	西大寺山古墳 (南大伴)	円墳	丘陵上・耕作地	民有地		粘土模型造構・円錐埴輪・鉄劍形製品鉄小札	古墳時代中期末~後期初頭	1600
23		遺物散布地? 丘陵腹・耕作地	民有地		S-N 160m・ E-W 120m	土師器・須恵器		
24	平木遺跡 (東板持)	集落址	丘陵腹	民有地	NW-S E 100m NE-SW 30m	弥生土器	弥生時代後期	
25	梅田遺跡 (西板持)	集落址	台地上・耕作地	民有地	S-N 180m・ E-W 40m	弥生土器・須恵器	弥生時代~	
26-1	板持丸山古墳 (東板持)	円墳	丘陵上・耕作地	民有地	全墳・径 35m・高さ 4 m	葺石・平円方形帶変形神紋鏡・素面頭状鉄製品・円錐埴輪・形象埴輪	古墳時代中期	1607 12/16 30/45
26-2	板持第4号墳 (東板持)	円墳	丘陵上・山林	民有地			古墳時代	
26-3	板持古墳 (東板持)	前方後円墳	丘陵上・山林	民有地	全墳	葺石・埴輪	古墳時代	
26-4	板持第1号墳 (東板持)	円墳	丘陵上・山林	民有地	径 15m		古墳時代	
26-5	板持第2号墳 (東板持)	円墳	丘陵上・山林	民有地	全墳・径 15m・高さ 2.5m	組合式木棺を内部主体にした土塙墓・鐵刀子 1・鐵劍 6・土玉約 400・須恵質杯 4・杯蓋 2・土師質壺 1	古墳時代後期 (6世紀初頭)	2740
26-6	板持第3号墳 (東板持)	前方後方墳	丘陵上・山林	民有地	全墳・全長 40m・後方部一辺 25m・前方部幅 15m・後方部高 4 m・前方部高 2.5m	木棺を内部主体とする土塙墓・重圓文鏡 1・鐵製短劍 2・鐵刀子 1・鐵劍 1・鐵鍔 10枚本・銅鏡 10枚本・土師壺片数点・須恵質鏡骨器 1	古墳時代	2740
27	尾平遺跡 (東板持)	集落址	台地上・耕作地	民有地	S-N 670m・ E-W 100m	弥生土器・石鏡・サスカイト・土師器・須恵器	弥生時代~	
28	柿ヶ坪遺跡 (下佐留)	集落址	台地上・耕作地	民有地	S-N 550m・ E-W 140m	弥生土器・石鏡・須恵器	弥生時代~	

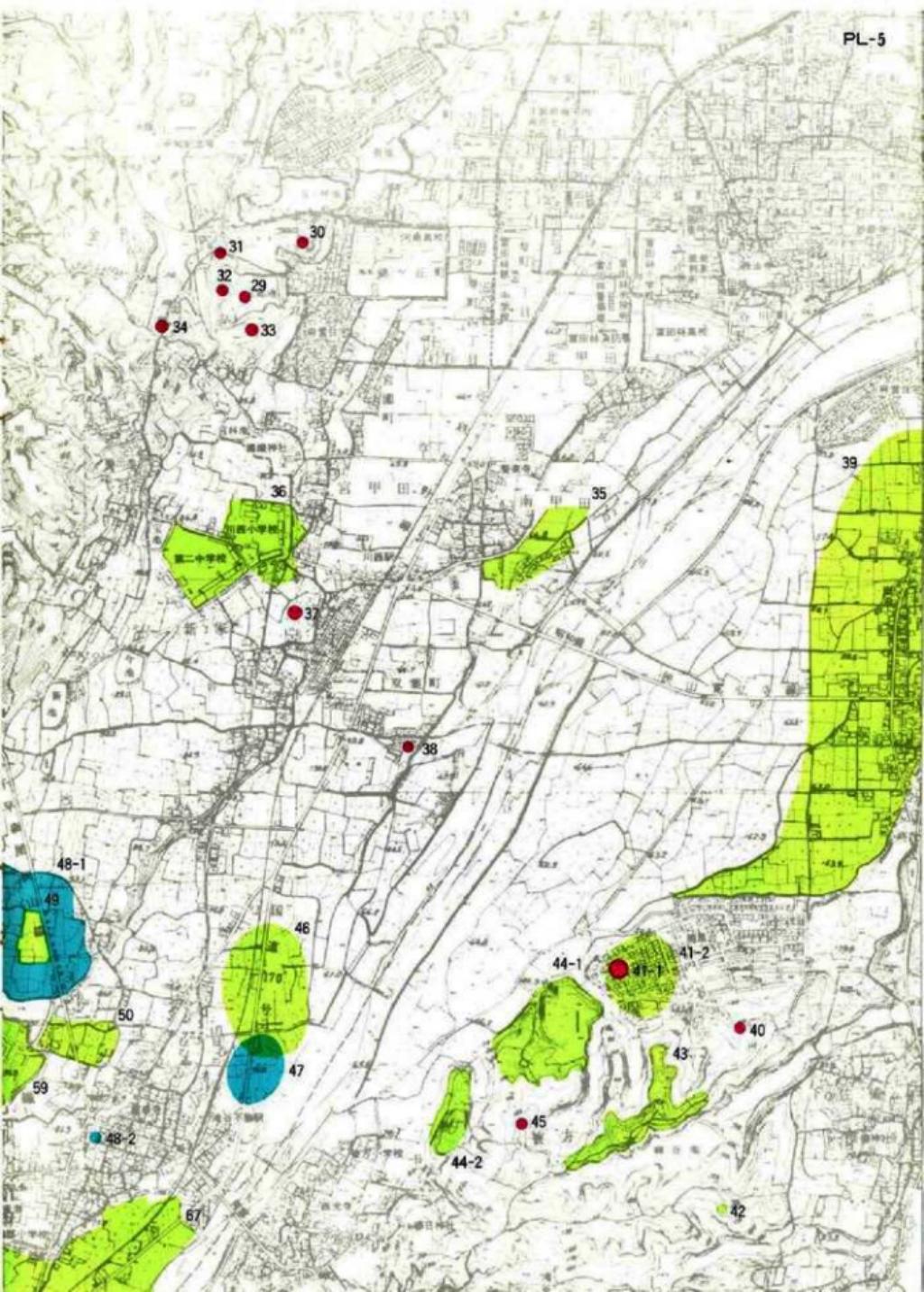


図-50 板持2号墳の須恵器出土状態



PL-5 遺跡一覧表

対照番号	遺跡名(所在地)	種類	立地・地目	所有別	概 横 範 囲	遺 墓 ・ 遺 物	時 代	文 献
29	だいだい池 火葬墓(宮甲田)	火葬墓	丘陵腹・灌木	民有地		土師質壺形土器 3・須恵質杯蓋	奈良時代(8世紀後半)	42
30	葉山(神山町)	古墳の可能性あり。	丘陵上・山林	民有地				
31	葉山(神山町)	古墳の可能性あり。	丘陵上・山林	民有地				
32	クロイケ (宮甲田)	古墳の可能性あり。	丘陵上・山林	民有地				
33	椎木谷(宮甲田)	古墳の可能性あり。	丘陵上・山林	民有地				
34	富林(小金平)	古墳の可能性あり。	丘陵上・山林	民有地				
35	甲田遺跡 (南甲田)	集落址	台地上・耕作地	民有地	N E - S W 250m・ N W - S E 100m	須恵質壺・杯身	奈良時代前期	40
36	新家遺跡 (西甲田)	集落址	台地上・宅地	市有地	S - N 260m E - W 340m	土師器		
37	新家古墳 (甲田169)	円墳	台地上・竹林	民有地	径22m・高さ2.7m	埴丘の北側から西側にかけて、縦9~10mの周濠がある。円筒埴輪・甲冑埴輪	古墳時代中期	1600
38	川西古墳 (甲田)	円墳?	台地上・宅地	市有地	全塙	壠穴式石室(櫻石)ただし、これは江戸時代遺物を再発掘する為に構築したもの。短甲・眉庇付舟・鉄刀・鉄鏃・歌・金銅金具	古墳時代中期	1310 90
39	西板持遺跡 (西板持)	集落址	台地上・耕作地	民有地	S - N 1100m・ E - W 450m	弥生土器・サスカイト・須恵質壺・瓦		40
40	鶴風台古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	完存?・径14m・高さ1m	土師器	古墳時代	
41-1	波方丸山古墳 (波方)	円墳	丘陵端	民有地	径40m・高さ3m	周濠・葺石・埴輪	古墳時代	1040
41-2	波方遺跡 (波方)	集落址	丘陵端・宅地	民有地	全塙・S - N 150m・ E - W 150m	弥生土器・土師器	弥生時代後期~古墳時代	
42	西山遺物散 布地(治谷)	遺物散布地	丘陵腹・山林	民有地	S - N 20m・E - W 20m	弥生土器	弥生時代	
43	インノ谷遺 跡(治谷)	集落址	丘陵上・山林	民有地	S - N 300m・ E - W 340m	弥生土器	弥生時代後期	40
44-1	中ノ平遺跡 (波方)	集落址	丘陵上・山林	民有地	S - N 230m・ E - W 240m	弥生土器	弥生時代	
44-2	ジョ山遺跡 (波方)	集落址	丘陵上・山林	民有地	S - N 180m・ E - W 60m	弥生土器・土師器・須恵器	弥生時代~	
45	波方古墳 (波方)	円墳	丘陵上・紫樹園	民有地	径25m内外	亀甲形陶棺	古墳時代後期	40
46	錦織文遺 跡(錦織)	集落址	台地上・耕作地	民有地	S - N 300m・ E - W 190m	绳文土器(北白川下層Ⅱ・Ⅲ式)・石旗・石頭・石斧・土師器・須恵器	绳文時代前期 ~	1510 1740
47	錦織廻寺 (錦織)	寺院址	台地上・耕作地	民有地	S - N 160m・ E - W 110m	複弁蓮華文軒丸瓦・平瓦・土師器・須恵器	平安時代	40
48-1	細井庵寺 (錦織)	寺院址	台地上・耕作地	民有地	S - N 320m・ E - W 350m	重輪文軒平瓦・複弁蓮華文軒丸瓦・平瓦・同心円印目痕をもつ壺・須恵器	奈良時代前期 ~中世	40
48-2	寺石(錦織)	台地上	民有地			細井庵寺の礎石の一部?(切石)		40
49	原田遺跡 (錦織)	集落址	台地上・耕作地	民有地	S - N 120m・ E - W 60m	石獅・石匙・土師器・須恵器	绳文時代~	
50	寺池遺跡 (錦織)	集落址	台地上・耕作地	民有地	S - N 50m・ E - W 110m	弥生土器・石槍・土師器・須恵器・瓦	弥生時代	40

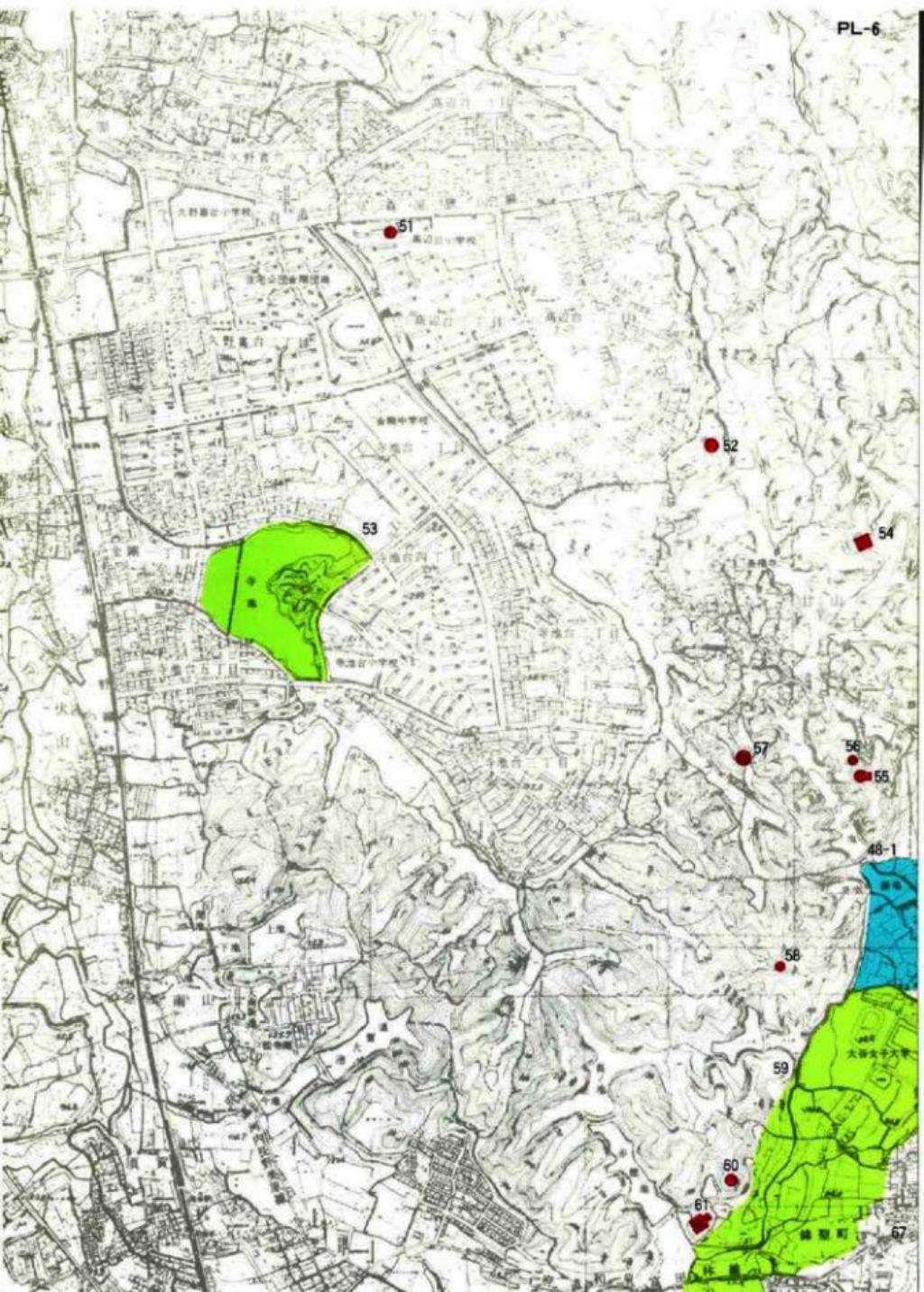


PL-6 遺跡一覧表

対照 番号	遺跡名 (所在地)	種類	立地・地目	所有別	規模範囲	遺構・遺物	時代	文献
51	櫻坂古墓 (高辻台)	火葬塚	丘陵上・山林	民有地	全墳	凝灰岩製藏骨器		ME
52	甘山古墓 (甘山)	火葬塚	丘陵上・山林	民有地	全墳	凝灰岩製藏骨器	奈良時代後期	
53	寺ヶ池遺跡 (寺池台)	集落址	丘陵側・池・堰	民有地	S-N 400m・ E-W 400m	石獅	押文時代	ME
54	甘山方墳 (甘山)	方墳	丘陵上・雜木林	住宅公團	一边32m・高さ 7m・二段築成		古墳時代後期	ME
55	甘山古墳 (甘山)	前方後円墳	丘陵上・山林	民有地	既掘手墳・全長48m・後 円部幅30m・高さ 5m・ 前方部幅22m・高さ 2m	木棺桿造構?・定角式銅鏡 9・その 他の銅鏡・鐵鏡・刀劍の出土を伝える。	古墳時代前期	(2016) ME
56	二本松(甘山)	円墳?	丘陵上・山林	民有地	古墳の可能性あり。			
57	南浦(甘山)		丘陵上・山林林	民有地	古墳の可能性あり。			
58	南坪池古墳 (錦織)	円墳	丘陵上・山林	民有地	径17m・高さ 1.7m	横穴式石室・須恵器・凝灰岩小片・ 同心円文を有する埴小片。	古墳時代後期	
59	錦織遺跡 (錦織)	集落址	台地上・耕作地	民有地	S-N 900m・ E-W 350m	弥生土器・石獅・土師器・須恵器	弥生時代~	
60	堂ノ山 (錦織)	円墳?	丘陵上・山林	民有地	古墳の可能性あり。径20 m・高さ 2m	横穴式石室?		
61	大日山 (錦織)	前方後方墳 ?	丘陵上・山林	民有地	古墳の可能性あり。全長 約60m			



図-51 櫻坂古墓の凝灰岩製骨藏器



PL-7 遺跡一覧表

対照 番号	遺跡名 (所在地)	種類	立地・地目	所有別	規模範囲	遺構・遺物	時代	文献
62	中佐備窯跡 (中佐備)	須恵窯址	丘陵腹・果樹園	民有地		登窯・須恵質大型・高杯・蓋杯・壺	古墳時代後期	40)
63	佐瀬川流域 遺跡(上佐 瀬屯泉・甘 雨備)	集落址	台地上・耕作地	民有地	S-N 2200m · E-W 300m	石器・サスカイト・土師器・須恵器 ・瓦器	弥生時代～鍾 倉時代	
64-1	竜泉寺 (竜泉)	寺院	丘陵腹・境 内	民有地	S-N 160m · E-W 130m	單弁蓮華文軒丸瓦・複弁蓮華文軒丸 瓦・平瓦	奈良時代前期 (白鳳)	
64-2	竜泉寺址 (竜泉)	寺院址	丘陵腹果樹園	民有地	S-N 100m · E-W 80m	丸瓦		
64-3	竜泉寺址 (竜泉)	寺院址	丘陵腹・果樹園	民有地	S-N 70m · E-W 80m	平瓦		
65-4	竜泉古墓 (竜泉)	火葬墓	丘陵上・果樹園	民有地		須恵質有蓋短脚壺 1・須恵質甕 2	平安時代前期	45)
65	佐瀬川遺跡 (竜泉)	集落址	台地上・耕作地	民有地	S-N 130m · E-W 110m	石器・サスカイト細片多數・土師器 ・須恵器	繩文時代～	
66	尾上組内 (甘雨備)	田墳?	丘陵上	民有地	古墳の可能性あり。			

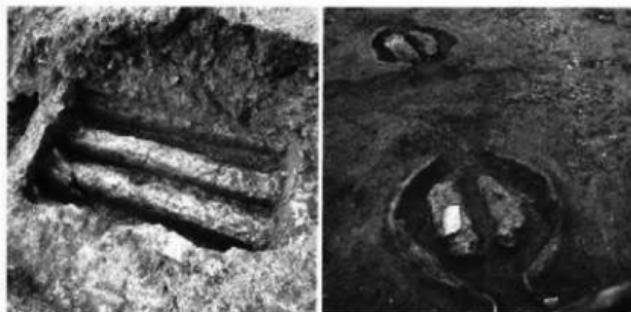
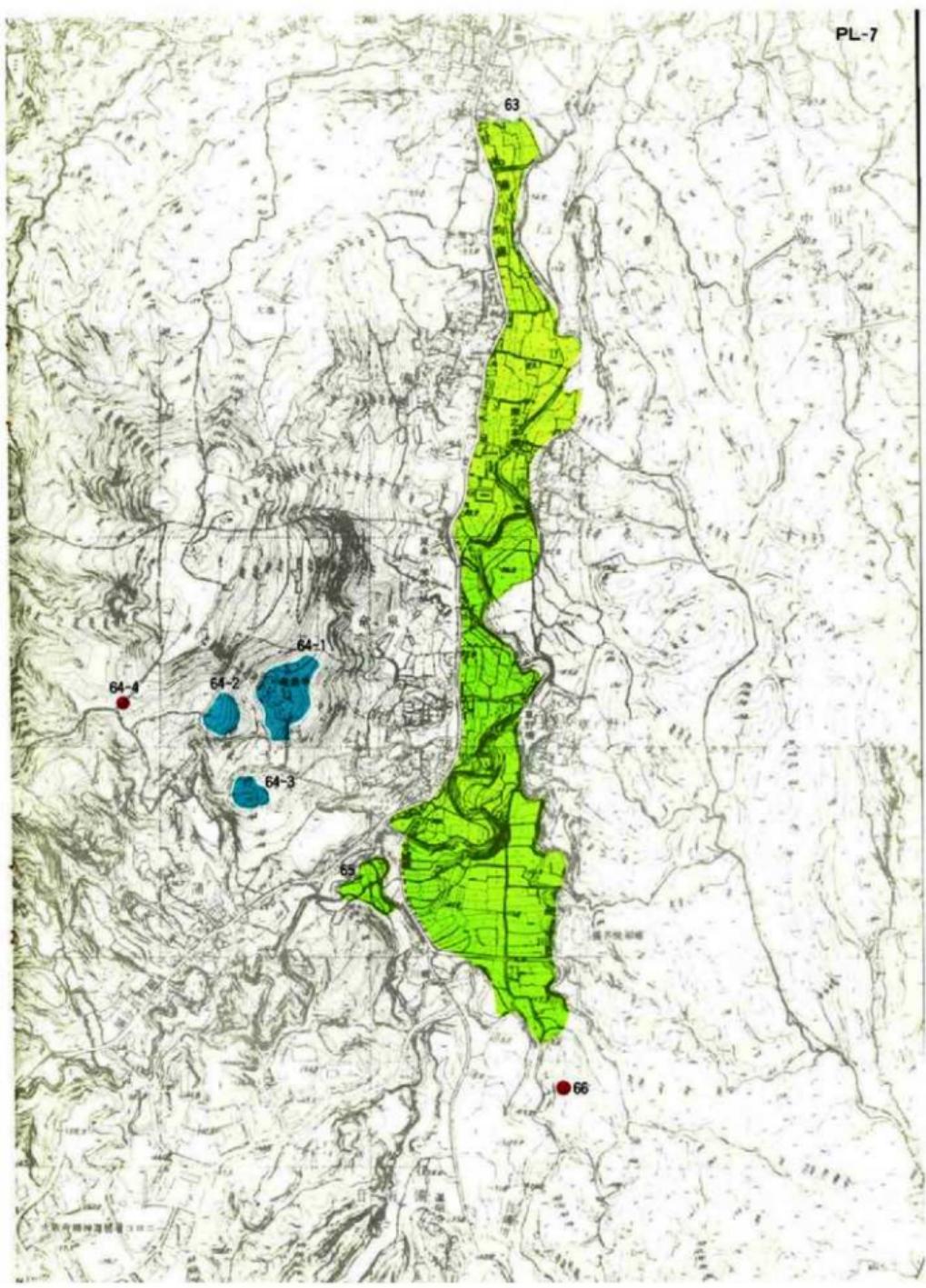


図-52 竜泉寺城内出土の瓦窯

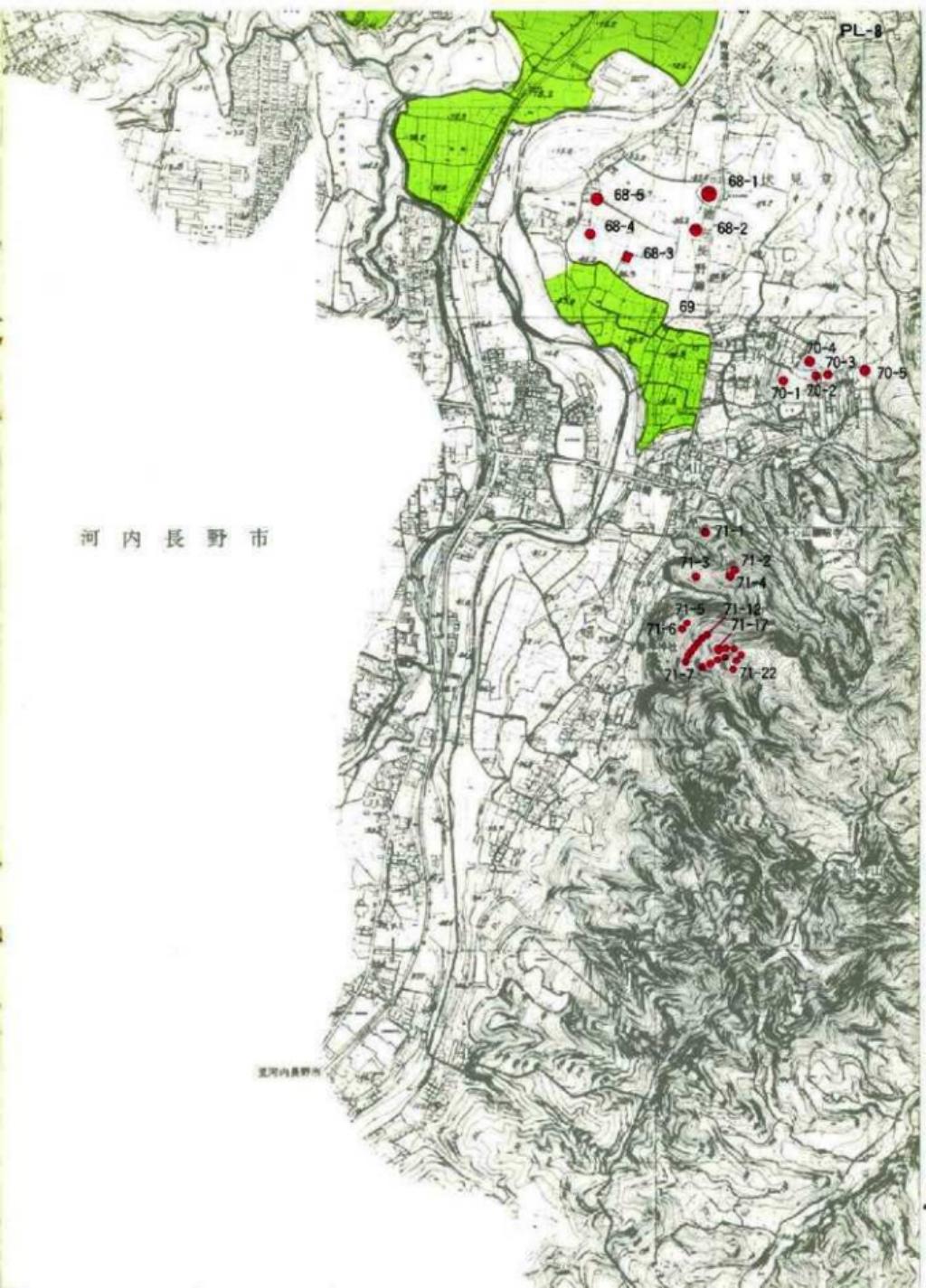


PL-8-9 遺跡一覧表

番号	遺跡名 (所在地)	種類	立地・地目	所有別	規模範囲	遺構・遺物	時代	文献
67	銀城南通跡 (鶴崎)	集落址	台地上・耕作地	民有地	S-N 1050m・ E-W 500m	石器・土師器・須恵器	弥生時代～中世	
68	西野々古墳群 (伏見堂)							0809 40
68-1	第1号古墳	円墳	台地上・雜木林	民有地	径34m・高さ5m	横穴式石室?・埴丘二段築成・周濠の痕跡あり。円筒埴輪	古墳時代	
68-2	第2号古墳	円墳	台地上・雜木林	民有地	半墳・径25m・高さ4m	横穴式石室?	古墳時代	
68-3	第3号古墳	方墳	台地上・荒原地	民有地	半墳・一辺28m? 高さ2.5m		古墳時代	
68-4	第4号古墳	方墳?	台地上・果樹園	民有地	1辺約15m?・高さ4m		古墳時代	
68-5	第5号古墳		台地上	民有地			古墳時代	40
69	伏見堂通跡	集落址	台地上・耕作地	民有地		绳文土器?・石器・土師器・須恵器	绳文時代～	
70	田中古墳群 (伏見堂)							0821 0224
70-1	第1号古墳	円墳	丘陵端・荒原地	民有地	半墳・径25m・高さ4.5m	横穴式石室(全長10.5m)・鍛冶金銅 張馬具付金具5・青銅1・铁刀残欠2 ・鉄劍5・須恵質高杯4・罐3・須恵質 壺1・須恵質蓋7・装飾付壺残欠若干	古墳時代後期	0841
70-2	第2号古墳	円墳	丘陵腹・荒原地	民有地	全墳・径25m内外	横穴式石室(全長7.5m)・凝灰岩製石 形石棺を安置。須恵質壺・近世素燒 土器石棺蓋は市立第2中学校へ移築。	古墳時代後期	
70-3	第3号古墳	円墳	丘陵腹・荒原地	民有地	全墳・径25m内外	横穴式石室(全長8.5m)・凝灰岩製石 形石棺を安置?・須恵質壺・近世土 器・石製鏡	古墳時代後期	
70-4	第4号古墳	円墳	丘陵端・山林	民有地	径30m・高さ5m	横穴式石室(全長9.15m)	古墳時代後期	
70-5	第5号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	径9m・高さ2.5m	横穴式石室?	古墳時代後期	
71	駿山古墳群 (横山)							0809 40
71-1	第1号古墳	円墳	丘陵端・荒原地	民有地	石室破壊	横穴式石室	古墳時代後期	
71-2	第2号古墳	円墳	丘陵上・山林	民有地	半墳・径25m・高さ3m	横穴式石室?	古墳時代後期	
71-3	第3号古墳	円墳	丘陵上・山林	民有地	半墳・径20m・高さ3m	円筒埴輪	古墳時代後期	
71-4	第4号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	半墳・径15m・高さ2.5m	横穴式石室?	古墳時代後期	
71-5	第5号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	徑12m・高さ3m	横穴式石室(全長4.8m)	古墳時代後期	
71-6	第6号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	半墳・径10m・高さ3m		古墳時代後期	
71-7	第7号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	徑12m・高さ3m	横穴式石室	古墳時代後期	
71-8	第8号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	徑10m・高さ2m		古墳時代後期	
71-9	第9号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	半墳・径10m・高さ2m		古墳時代後期	
71-10	第10号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	半墳・径13m・高さ3m	横穴式石室	古墳時代後期	
71-11	第11号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	完存?・径7m・高さ2m	横穴式石室	古墳時代後期	
71-12	第12号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	盃掘穴あり。径12m・高 さ3m	横穴式石室	古墳時代後期	
71-13	第13号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	半墳・径9m・高さ3m	横穴式石室?	古墳時代後期	
71-14	第14号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	半墳・径12m・高さ2m		古墳時代後期	
71-15	第15号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	盃掘穴あり。径9m・高 さ1.5m		古墳時代後期	
71-16	第16号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	完存?・径7m・高さ1.5m		古墳時代後期	
71-17	第17号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	半墳・径28m・高さ2.5m	横穴式石室?	古墳時代後期	
71-18	第18号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	盃掘穴あり。径10m・高 さ1.5m		古墳時代後期	
71-19	第19号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	盃掘穴あり。径8m・高 さ1.5m		古墳時代後期	
71-20	第20号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	径10m・高さ3m		古墳時代後期	
71-21	第21号古墳	円墳?	丘陵腹・山林	民有地	古墳の可能性あり。径10 m・高さ2m		古墳時代後期	
71-22	第22号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	径13m・高さ3m	横穴式石室(全長5～6m)	古墳時代後期	
71-23	第23号古墳	円墳	丘陵腹・山林	民有地	古墳の可能性あり。径15 m・高さ2m		古墳時代後期	
金剛寺山通路		不明	丘陵腹・山林	民有地		銅器の出土を伝える。		40

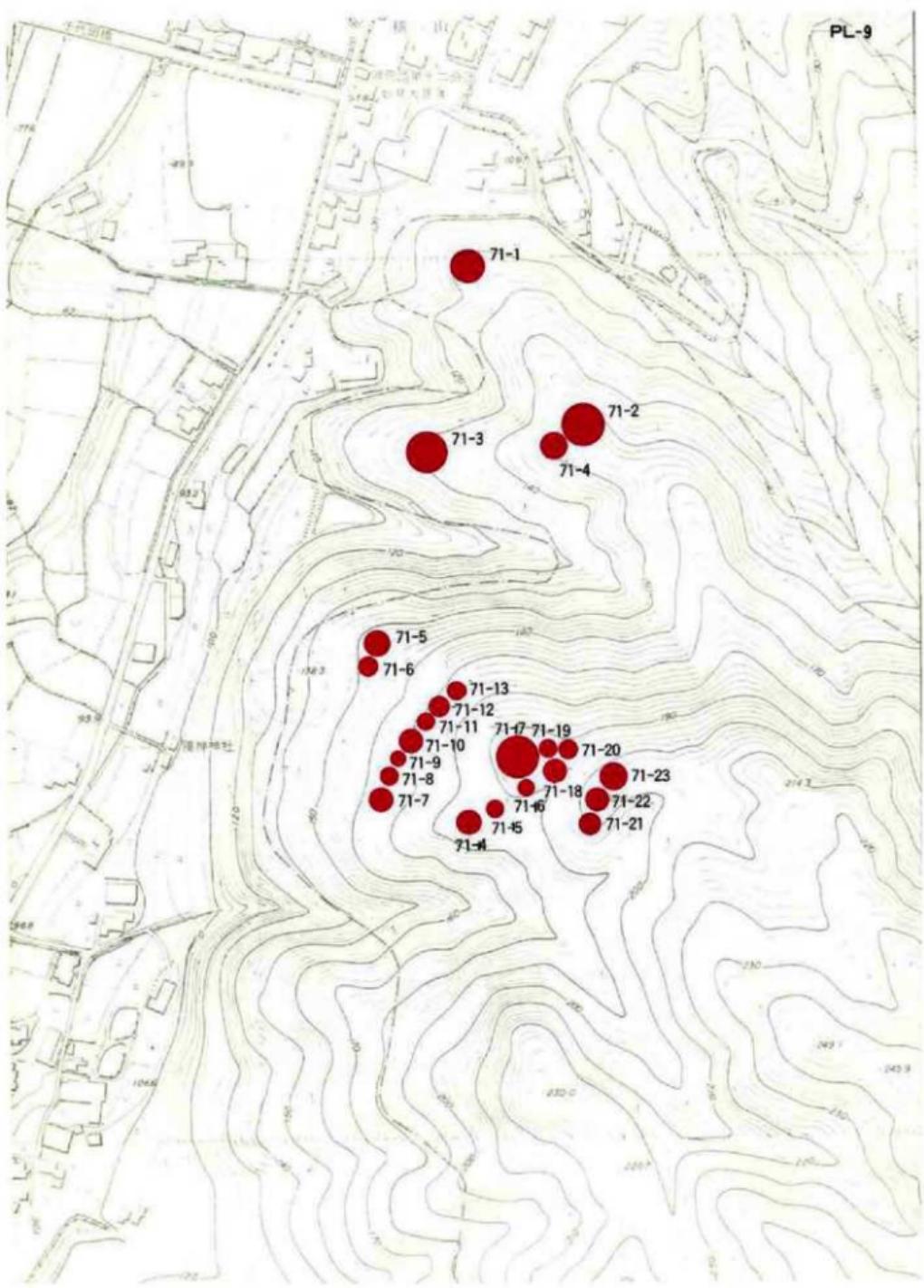
河内長野市

河内長野市



〈文献〉

- (1)高橋健自「河内に於ける一種の古墳」『考古学雑誌』第4卷第4号、1913年)
- (2)梅原末治「近時調査せる河内の古墳」『考古学雑誌』第5卷第3号、1913年)
- (3)梅原末治「南河内の三小群集墳」『歴史地理』第22卷第5号、1913年)
- (4)梅原末治「お龜石・石宝殿と鬼俎・鬼廟」『歴史地理』第23卷第5号、1914年)
- (5)梅原末治・島田貞彦「河内国南高安及び暮志石器時代遺跡調査」『京大考古学研究報告』第2冊、1917年)
- (6)富岡謙蔵「日本彷彿古鏡に就いて」(『古鏡の研究』所収、1920年)
- (7)後藤守一「漢式鏡」(1926年)
- (8)末永雅雄「本山考古室要録」(1934年)
- (9)末永雅雄「日本上代の甲冑」(1934年)
- (10)梅原末治「大阪府下に於ける主要な古墳墓」其2(『大阪府報第5輯』図版、1934年)
- (11)石田茂作「飛鳥時代寺跡の研究」(1936年)
- (12)後藤守一「古鏡聚英」(1942年)
- (13)宇野伝二「上代短甲組織卑見」(末永雅雄『日本上代の甲冑』、1944年所収)
- (14)末永雅雄「池の文化」(1947年)
- (15)北野耕平「錦織絹文遺跡について」『古代学研究』第5号、1951年)
- (16)北野耕平「考古学より見た富田林」(『富田林市誌』、1955年)
- (17)大阪大学国史研究室「河内新堂廢寺」(『第1期調査報告』、1960年)
- (18)大阪府教育委員会「河内新堂・鳥含寺跡の調査」(1961年)
- (19)小林行雄・佐原真「紫雲出」(1964年)
- (20)藤直幹・井上薰・北野耕平「河内における古墳の調査」(『大阪大学文学部国史研究室報告』第1冊、1964年)
- (21)勝部明生「田中山古墳群」(『大阪市立博物館』No.3、1964年)
- (22)安井良三「横穴式石室の内部施設に関する一考察」(『先史学研究』第5号、1965年)
- (23)堀田啓一「西日本における横口式石棺の古墳について」(『先史学研究』第5号、1965年)
- (24)森浩一「古墳の発掘」(中公新書、1965年)
- (25)小林行雄「古鏡」(1965年)
- (26)井藤徹「鍋塚古墳発掘調査概要」(大阪府教育委員会、1966年)
- (27)富田林市教育委員会「富田林市板持古墳群調査概報」(1967年)
- (28)京都大学文学部「京都大学文学部博物館考古学資料目録」第1部
- (29)京都大学文学部「京都大学文学部博物館考古学資料目録」第2部(1968年)
- (30)野上丈助「河内の古墳」(1968年)
- (31)門脇祐二「飛鳥その古代史と風土」(NHKブックス、1970年)
- (32)大阪府教育委員会「南河内石川流域における古墳の調査」(『大阪府文化財調査報告』第22輯、1970年)
- (33)置田雅昭「南河内発見の有茎尖頭器一例」(『古代文化』第22卷第3号、1970年)
- (34)小林行雄「古墳時代の研究」(1970年)
- (35)中村浩「大阪府富田林市竜泉出土の藏骨器について」(『考古学雑誌』第55卷第3号、1970年)
- (36)大阪市立博物館「大阪市立博物館蔵品目録」(1970年)
- (37)渡辺誠「大阪府富田林市錦織出土の繩文土器」(『古代文化』第23卷第3号、1971年)
- (38)井上薰「富田林の古墳調査にきたガウランド」(『日本歴史』第281号、1971年)
- (39)福垣晋也編「古代の瓦」(『日本の美術』第11号、1971年)
- (40)大阪府教育委員会「平古墳発掘調査概要」(1972年)
- (41)北野耕平「富田林市史」第4巻(1972年)
- (42)松井忠春「富田林出土の藏骨容器」(『古代研究』第1号、1973年)
- (43)朝日新聞社「飛鳥展」(1973年)
- (44)堀田啓一「河内考古学散歩」(1975年)
- (45)大阪市立博物館「大阪の古代史発掘——繩文から古墳時代——」第72回特別展図録(1976年)
- (46)猪熊兼勝「飛鳥時代墓室の系譜」(『研究論集Ⅲ・奈良国立文化財研究所学報』第28冊、1976年)
- (47)関西大学文学部考古学研究室「大師山」(1977年)



あとがき

いま、竹谷俊夫君の非常な尽力で印刷に廻すことのできる『富田林市の埋蔵文化財』の原稿を前にしてみると、分布調査当時の皆さんの苦労、それをよく援助して頂いた市教育委員会の方々の協力が改めて回想される。

分布調査にさいして用いたカードはA5版の大きさの厚手のもので、表には名称、所在、現状、所有者住所、氏名と型通りの欄を設け、ついで遺跡の状況、出土遺物・数量、総合所見をそれぞれの枠内に記入してもらう欄を作った。とくに所在地が確実になるように、市教委基本原図として2500分の1地図を使い、これをもとにカードの裏面に略測図と大体の範囲を赤で囲むことにした。出土遺物・数量も裏面にスケッチを加えて補うことを考慮したのである。表は茶色のインクで、裏は方眼を印刷する関係から馴染みやすいよう薄いグリーン色とした。

全域をどのように余すところなく調査をするかという方法が問題となったが、いろいろ検討の結果、全市域を一辺200mの正方形のメッシュでくまなくおおい、この中の耕作地はすべて足をふみ入れることにし、地区ごとに数ブロックずつにまとめて各年度に実施することにしたのであった。

実際に踏査にあたってくれたのは、地元の河南高等学校と富田林高等学校の考古学クラブに属している生徒諸君で、各班の調査責任者には、もとクラブ員で大学在学中のOBの諸君を主としてお願いした。一か所に定着して実施する発掘調査と違い、道路上をたえず通行する関係上、交通事故が最も心配で、いつも踏査のシーズンが始まる前に皆さんに車に注意するをお願いしてきた。さいわい分布調査の数年間、一件の事故もなく完了できたのは、責任者となってくれたOBの人達の少なからぬ配慮があったからと感謝にたえない。

踏査する上で思わず苦心もあった。地表面がよく観察でき、歩きやすいように冬から春のシーズンを選ぶようにしたのは、同時に耕作地に立入っても作物に影響がないことを配慮したからであった。しかし畑には冬の野菜もある。無断で立入ったというので地主から追立てられたのは、そうした事情のためである。翌年度からは調査を理解してもらえるようにと、市教育委員会からこのための身分証明書を発行することにした。

表面採集した遺物は地点ごとにビニールの採集袋に入れて届けられた。種多な遺物なのでクラブの現役の諸君に判断のつかないものは、OBの諸君が先駆としての経験を生かして鑑定した。カードに記入する必要からも遺物の名称、年代の決定は是非行わなければならず、苦心したにちがいない反面、たいへん勉強になったはずである。結局わからないものは私のところへ持ち込まれた。彼方の陶片などはこうして予期せぬ収穫となった。

昭和30年に初めて市政5周年を記念して富田林市誌が刊行されたとき、判明していた遺跡は15か所くらいにしかすぎなかった。それも市誌の考古編を執筆するというので、新たに踏査して加えることできた数ヶ所をあわせてである。それ以来20年、今度の埋蔵文化財の分布調査では、遺跡の数は75か所に達している。今回の踏査によって発見した遺跡は伏見堂、佐藤川など縄文遺跡かと考えられるものをはじめとして少なくない。

しかし一面、僅か20年間にそれほど遺跡の数が増加したいきさつの陰には、市の開発にさいしてこれまでわからなかった遺跡が発見されるということと、同時にその遺跡がそのまま保存されるのではなくて、遺跡自体がその開発のために姿を消すという苦い結果に陥ったことがある。この埋蔵文化財の分布調査の目的も、そうした体験を生かして事前に埋蔵文化財の現況を把握し、保存のための積極的な対策を講じる上での基本資料を作製することであった。いわば本書は昭和53年現在における富田林市の埋蔵文化財についての、実地踏査に基づいた白書であるといえよう。

本書が分布調査の開始から市教育委員会の事業として行われ、ここにその成果が刊行されるようになったことを高く評価したい。もちろん、これまで大阪府教育委員会によって、文化財保護課の指導のもとに大阪府全域の文化財分布地図が刊行されてきた。府下の文化財分布の基準となるものであり、文化庁の全国にわたる埋蔵文化財分布調査の重要な一部としての位置を占めていることはいうまでもない。

同時に市・町・村単位で文化財行政の第一歩の指導を行うためには、それぞれの地方行政機関で細部にわたっての工夫をこらし、努力することが必要であろう。義務教育は指導要領を基準としなければならない。しかし現場での教育は教育者の創意と勉強とが要求される。文化財行政の第一線を受けもつ市教育委員会としては、埋蔵文化財の現況把握に努め、大阪府の指導と連絡を緊密に受けて、本書を参考に文化財の保存と活用に当てて頂くように改めてお願いしたい。

昭和53年3月

監修者 富田林市文化財調査委員
神戸商船大学教授 北野耕平

(調査主任)

北野耕平

(調査主任補佐)

竹谷俊夫

(調査協力者)

岡本清成・置田雅昭・棚橋利光・中村 浩・西野良政・松井忠春

(調査参加者)

浅田博昭・伊藤維寿弥・浦野政邦・奥野利明・加藤晴久・壁谷輝美・北橋伸夫・清瀬直澄・小泉 融・小谷光一・高塚正弘・竹口昌子・竹谷俊夫・田中紀子・田中申幸・田中 文・辻 道男・寺田 明・道脇ゆみ子・中辻 真・名越美子・西野寿夫・野田裕子・畠岳 雄・鶴口吉文・伏見真由美・藤本輝美・藤原良子・増田妙子・益原淳子・松川利隆・松永恵一・山中雄二・山村夫美・脇田 久(五十音順)

(事務局)

富田林市常盤町11番1号

富田林市教育委員会 社会教育課

TEL 07212(4)1451

発 行：昭和53年3月31日

編集・発行：富田林市教育委員会

富田林市常盤町1番1号

TEL 07212-5-1000

